LA REVUO ORIENTA

1934

エスペラント研究

JARO 15 N-RO 1

OKTOBR

1 9 3

JAPANA ESPERANTO-INSTITUT

LA REVUO ORIENTA 目次 JARO XV N-RO 10, OKT. 1934

—附 錄—

JARO XV, N-RO 10 OKTOBRO, 1934

LA REVUO ORIENTA

Monata Organo de JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO, Hongoo-ku, Motomaĉi I, TOKIO, Japanujo



今夏ストツクホルムにおける
第廿六回萬國エスペラント大會の盛況

日本詩歌のエス譯について

(7)

松葉菊延

Waringhien は Parnasa Gvidlibro に於て gramatika akcento と ritma akcento とを區別し、その例として、Zamenhof によつて譯された Goethe の Kapeleto の最初の聯:

Supre staras sur la monto
La silenta kapeleto,
En la valo, ĉe la fonto,
Ĝoje kantas paŝtisteto.

を示し、この中、ĉefakcentoj は第三音節 (staras; silenta; valo; kantas) 及び第七音節 (monto; kapeleto; fonto; poŝtisteto) にあるから、第二行最初の La 及び第四行 Ĝoje の Ĝo は弱くなり又全然アクセントを失ふことがあると云つた。

これに對して Bennemann は Goethe のこの原作に附された melodio にあつては、丁度この二つの音節が强音になつてゐると注意してゐるのは、[19] この場合、甚だ不可解な言である。

第一、エス譯と原作とに於て、必ずしも單語の配列が同一である筈はなく、又、エスペラントとドイツ語とに於て、全然同一の詩法によつて作詩されるのでもない。

それから、この Kapeleto を論ずるのに、それに附された melodio を引張り出すことが正しいかどうかは疑問である。

一體詩には、單に、讀まれるのみの詩と、讀まれ且、同時に歌はれところの詩と二つあることを知つてゐなくてはならない。

單に讀まれるのみの詩は、それ自身已に獨立した一個の完成品であるが、歌はれることを主とした詩は、必ずしもそれ自身完成品でない事がある。これについて Bennemann がその著 Internacia Kantaro の序文に於て、Tial mi tre petas la recenzontojn, ke ili ne kritiku la sekstojn kiel literaturaĵojn aparte de la muziko! と云つてゐるのは正しい。

Goethe の Kapeleto は、恐らく初めは單に讀まれる詩として作られたものと思ふ。もしそうとすれば、ここで melodio のことを引合ひに出すのは無意味である。

歌はれる詩に於ける文句、即ち歌詞と歌曲とは何れが先かと云へば、勿論普通は歌詞の方が先である。先づ詩があり、これに曲が附けられるのが順序であるが、逆に既に與へられた曲に適當に歌詞をつける事がある。

『荒城の月』『からたちの花』Zamenhof の La Vojo, La Espero, それから山田耕作、信時潔氏等によつて作曲された百人一首よりの短歌等は前者に屬し、讃美歌の歌詞、『小學唱歌集』に收められた數多き歐米の歌曲に附けられた邦語歌詞、例へば『哀れな少女』『螢の光』『庭の千草』『才女』、又 Schumann の Zigeunerleben に與へられた藤村作博士の『鶴ケ岡』、Mendelssohn の曲に附けられた高野辰之博士の『雲雀の歌』等は後者に屬する。

前者の場合にも、詩が作曲される事を豫期して作られる場合と、そうでない場合とがある。例へば、西條八十氏の數多き地方民謠、校歌、團歌などがこの第一の場合にあたる。

歌詞が、この様に分類されるのは、日本語のみに於ける現象でないことは勿論であるから、たとひ立派な詩であつても、それが初めから作曲を豫期したものでない以上、歌詞となつた場合に曲と完全に一致しない點が出てくるのは、まことに已むを得ない。

これに反し、詩が作曲されるために作られた場合は、歌詞と melodio とが完全に一致する筈である。
飜譯歌詞の場合も同樣、出來てゐる曲に合ふ樣譯さなくてはならぬから、歌詞と melodio とは完全に一致させる事が出來るわけである。

しかし、このためには、譯者は先づ音樂に

19) Literatura Mondo, 1932, p. 191.

Fig I

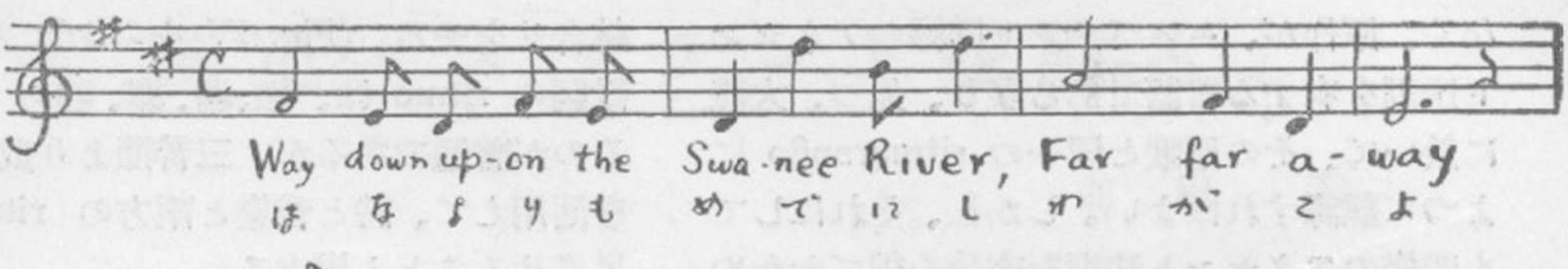


Fig II

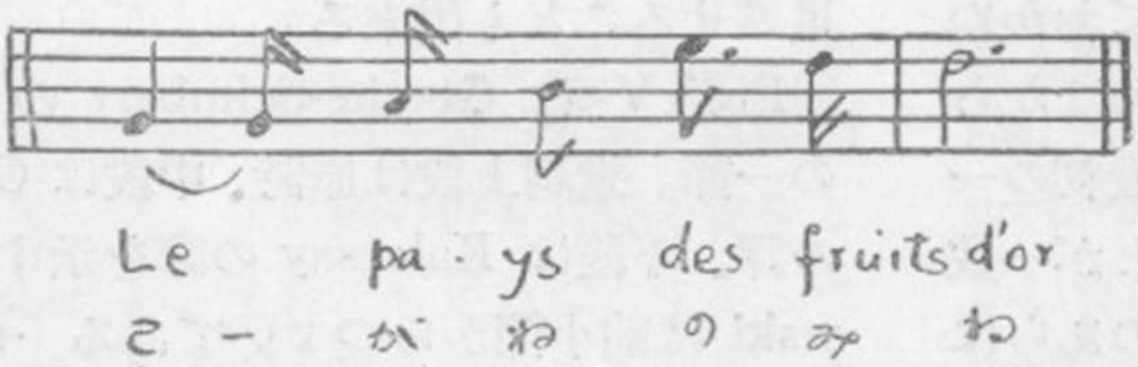


Fig III

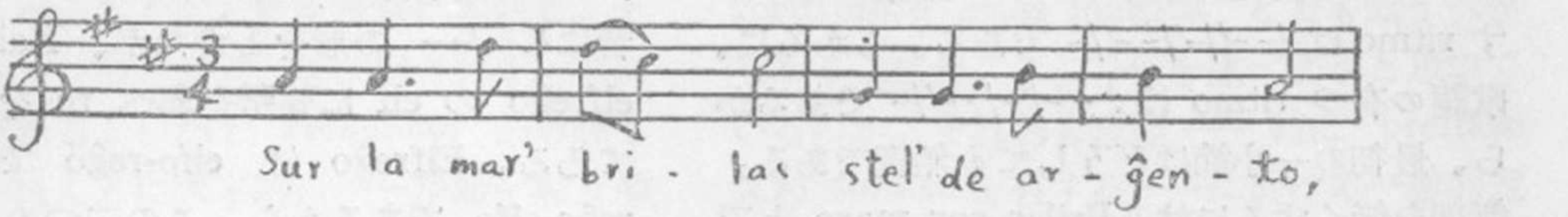


Fig IV



Fig V

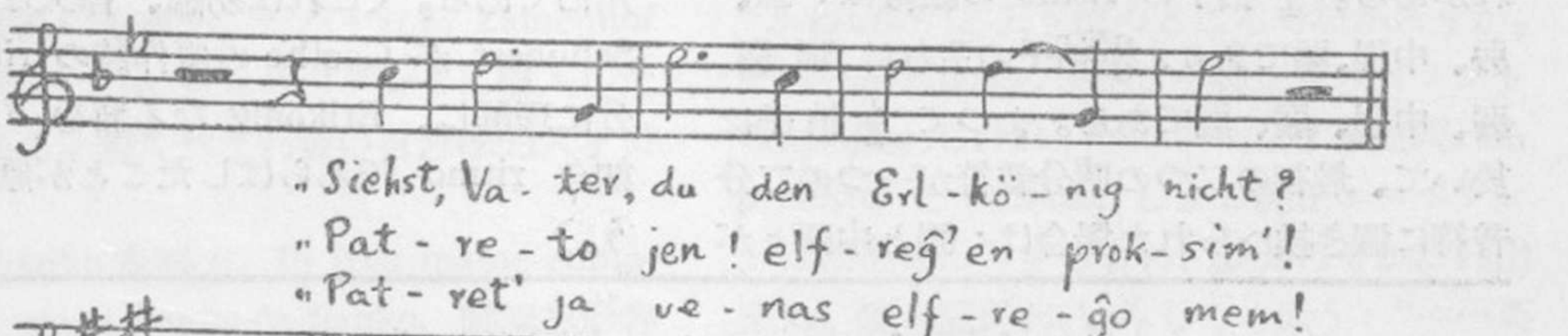
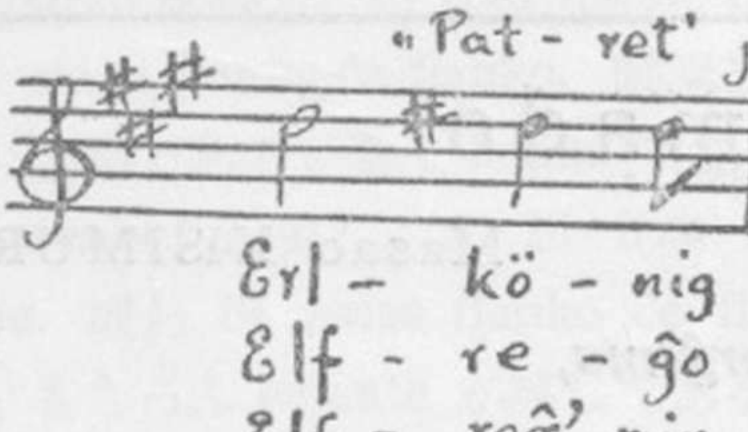


Fig VI



ついての一通りの知識を有し、如何にすれば歌詞と歌曲とが完全に一致するかを知らなければならない。

詩と音樂とは、ひとしく『音』を要素として成立する藝術ではあるが、詩のアクセントが、言語の特性により、或ひは音の强弱に基き、或ひはその高低に準據するに反し、音樂ではアクセントは常に音の强弱が之を支配する。

よつて、音の强弱によりアクセントの生れる言語は極めて音樂的であるに反し、日本語の如く、音の高低をアクセントの標準とする言語は非常に作曲され難い非音樂的言語といふことが出來る。よつて、曲に歌詞を附する場合例へば歌詞を邦語譯する場合には言語のもつ高低アクセントを、生かして Melodioにあはさないと妙な事になる。

Fig. I は讃美歌の一節である。『めでにしわが子よ』は、melodio のアクセントと、言語のそれとが極めてよく一致してゐるが、『はなよりも』の箇所に於ては、『下上』であるべき『花』が『上下』になつてゐるので、『はな』が『最初』『發端』のことにきこえて意味をなさない。(日本語のアクセントは東京語による。) Fig. II は有名な Mignon の初めの方で、『こがねのみわ』は勿論『黄金の實は』の意であるが、歌ふのをきいたのでは、『黄金のみは』即ち nur la Oro! としかならぬ。

エスペラント譯の場合は、この様な失敗は

なく、原作が、エスペラント同樣のアクセント法則を有する言語である限り、先づ、大體に於いて、その原歌と同一の ritmaranĝo によつて飜譯すればよい。しかし、それにしても音樂のアクセント法則を充分心得ておかぬと歌へないものが出來るから注意せねばならない。Fig. III は Sankta Lucio の最初の一節。音樂のアクセントと言語のそれとが一致しない點で模範的である。この樂譜のあらはす ritmo は /‒‒/‒/‒/‒‒/‒ である。しかるに、歌詞の有つ ritmo は：‒‒/‒/‒‒/‒ であるから、最初の一小節はどうしても無理である。無理を無くするには、Brilas sur maro とでもすればよい。この歌詞は Internacia Kantaro には六番まで出てゐるが、幸な事に二番以下は皆 ritmo が一致してゐる。

エスペラントの詩には强音はあるが、中强音といふのはない。ところが音樂の方にはこれがある。$\frac{4}{4}$ 拍子の ritmo の組織は：强、弱、中强、弱であり、$\frac{6}{8}$ 拍子のそれは、强、弱、弱、中强、弱、弱である。よつて $\frac{4}{4}$ 拍子に於いて、最初の二つの四分音符が一つの二分音符に置き換へられた場合は：强と中强とが鉢合せをやる。(Fig. IV をみよ)こんな場合、歌詞の ritmo は、强、弱、弱、即ち /‒‒ にするのが普通であるが、三音節より成る合成語を活用して、詩と音樂と兩方の ritmo を滿足させることも出來る。

Fig. V は Goethe-Schubert の Erlkönig の一節。歌詞上段は原詩、中段は Grabowski の譯、下段は Kalocsay の譯を示す。Grabowski は前小節からつゞいてゐる -reĝ' を强音にし /‒‒ の形をとつたが、Kalocsay は elfreĝo の elf に强勢を與へ re を中强にしてゐる。Elfreĝo は elfo-reĝo であつて又 reĝo-elfo であるから、この二つの vortelementoj のいづれを重くみてもよい。つまり、いづれもが重要な要素であるので、Kalocsay は巧みにこれを强—中强—弱の型であらはした。Fig. VI は同じ歌曲の他の一節であるが、Grabowski も Kalocsay も同じくこの法を用ゐてゐる。(これは勿論、偉大なる作曲家 Schubert が Goethe の原作詩の ritmo を充分に理解し、Erlkönig なる語を Fig. IV の如き ritmo であらはしたことが原因であらう。)

Animo-tremado

Masao NIŜIMURA

Sonorado senhalta, trilado plorĝema,
kun ĝojo korprema
dronas en son' en kant' en majesta korbato,
mi dronas trans hom-sperto, trans homo-sufero
en maja kantato,
en voĉo en karesa kvazaŭ am' patrina,
kvazaŭ ho senkonscie burĝonas kaj floras
en voĉo elsina.

Tra murmuro eona, tra sono-koloro
kun tuta adoro,
aŭdi la melodion, kiun neniu aŭdas,
el kiu koro ĝermis, aŭdi harmonion
al kiu ĝoj' taŭgas,
estas anim-tremado preskaŭ baldaŭ sveni,
estas anim-raviĝo preskaŭ sufokiĝi.
korkordo ho tremi.

ĉe rivero Kumanogaŭa.

純正エスペラントを護る

前　田　勤

Zamenhof の天才わ、どこにあつたか。それわ彼が非科學的であつた事である。各國語の單語を並べる。その内の最も共通の物をとる。Wüster わ、それでも足らぬとする。その言語を用いる人間の數を計算に入れる。そうして遂に一つの單語が選び出される。誠に科學的である。しかし Zemenhof わ敢然として――ほんとに天才的に――單語を射とめて lingvo とゆう形も考えられよう。しかし彼わ天才的に lingvo なる形をとつた。kavalo なる形もよからう。しかし彼わ ĉevalo をとつた。それわ全く彼の驚嘆すべき感からである。akuzativo の -n が -an, -on, -en の形で、いかにわがエスペラントの發音に美しく織りこまれいる事か。ただそれわ Zamenhof が非科學的に -n をエスペラントに導入したためである。驚くべきわ彼の言語學的天才である。

人わ logiko を叫ぶ。Ili iras ma-ne-enmano. Ili sidas flanke-ĉe-flanko. 動詞を形容する物わ副詞である。全く logika である。しかし Zamenhof わ美しくも Ili iras mano en mano. 或わ Ili sidas flanko ĉe flanko. と書く。もちろん estante が略してあるから logika であると人わ云う。しかし一見 nelogika に書きつらぬて、しかもこの短き文章に生氣を入れたのわ凡手の及ぶところで無い。いたづらに moderna stilo を弄ぶ歐の esperantisto-verkisto わ、この如き點で Zamenhaf に未だ學ぶべき點が、多々ありわしないか。nelogika 必ずしも捨つべきでわ無い。巧に利用せられた nelogika こそ純正エスペラントを成長せしむるべき一つの手段である。

エスペラントの合成語わ英語の意味に於ける idiotismo の一種である。sufikso, -ar- わ集團を示すとある。しかして vorto の集團 vortaro わ辭典である。これわ全く idiotismo に外ならぬ。しかも Zamenhof の驚くべき技術の產物である。vorto の集團＝辭典わ、ある意味に於てわ非科學的である。それと同時に天才的製作である。ある人わ云う：Mia vortaro estas malriĉa. わ可能であると。しかし私の考えによれば、これわ明かに Mia vorttrezoro estas malriĉa. とでも云うべきである。私わ、ここで何を述べようと思つているのか。それわ合成語――特に prefikso 又わ sufikso を有する――に於ける一義的意味の存在である。Ŝi estas ete bela. と Ŝi estas beleta. とわ Li daŭre parolas. と Li paroladas. とが異る如く異る。そうして beleta がエス和辭典が教えるが如く"小綺麗な"なる意味を有するか。それわ日本の esperantologoj の研究すべき問題である。むしろ"かわいい"と云う位のところでなからうか。その一義的意味の決定こそ純正エスペラントのため願わしけれ。ペンの一なすりで現れる prefikso と sufikso, しかし純正エスペラントに精進せんとする者わ、夢おろそかにわ出來ぬ。楚人冠氏わ、いみじくも云う："……英文を日本文に飜譯するといふは、英文が讀めないか、日本文が書けないかでなければ出來るものでないと信じてゐる私は、……"。それほど一つの言葉を他の言葉にうつすのわ、むづかしい。微妙な變化を示す prefikso 又わ sufikso を有するエスペラント語の邦譯、それわ中々むづかしき事である。

問題わ合成語ばかりでわない。もつと手近にもある。一字一音を定めた Zamenhof わ一語一意義をも理想としたにちがいない。そうして只今の ĥaoso わ！ artikolo わ冠詞であり、又記事である。radio が、いかに酷使せられている事か！彼わ lumradio でもあり duondiametro でもあり、更に近時 senfadena telefonio として益々その負擔を增加せられている。私わ彼をして、ただ暗黒を照らす一道の lumradio のみであらしめたい。radjo を以てその負擔を小ならしめんとする事も聞いたが喜ぶべき現象である。純文藝に精進し、

しかも非常に人氣のある作家があるとする。彼に Vi estas populara verkisto. との讃辭を奉つたら彼わ何と云うだらう。"君は人氣ある作家" だと思うか、はた "君わ通俗作家だ" と思ふか。もし、彼、後者に解すれば、せつかく奉つた讃辭わ彼の一撃をかち得るだろう この際 furoranta なる形容詞を用いれば波瀾なくしてすむとの事でわあるが popu-lara なる言葉が二義を有するをいかんせん。純正エスペラントを確立せんと欲する者わ、ここらにも一努力要する。

長石と云う礦物がある。現在の殆んど總てのエスペラントの辭書わ feldspato なる字を對應させている。ŝtrumpo と共に口ざわりの悪い事わ、あえて私のみでわあるまい。私わ報文を書く際、遠慮なく felsparo なる字を用いてしまつた。これ傳統に對する反逆だろうか。又、純正エスペラントを私意を以てみだすものか私わ否と答えたい。feldspar, felspar (英); Feldspat, Feldspar (獨): feldspath (佛) がそれに對應する國語である。しかし ── 少し柄にない話でわあるが ── 語原的に feld わ Fels, 岩から來たか、又わ Feld, 野から來たか今でわ解らないそうである。してみれば發音しやすく felsparo を用いるに何の不都合ぞ。殊に公用語でもないはづであるから。neologismo を導入する人わよほど頭を使つてほしい。形が國際性を帶び、しかもその聲、美しきものを！エスペラントわ眼のみのものでない。耳のものでもある。ŝtru-mpo 式の言葉でエスペラントを滿すのわ純正エスペラントを發達せしめるゆえんでわなかろう。

現在エスペラント界の ĥaoso わ ── 少くも私の見地でわ ── 冠詞 la の使用法である。Zamenhof わ "en ĉiuj *dubaj* okazoj tute ĝin ne uzu...." と云つている。しかし、かくも廣く用いられている la が全く姿を消したらば？ 顔に於ける鼻わ不思議な存在である。しかし一朝それが無くなつたらば？はじめから無ければそれまでである。しかし今、美しく織りなされているエスペラント文から愛すべき la がその姿を消したらば？殘るわ淋しき荒野である。してみればこの la を健全にもりたてる仕事こそ純正エスペラントに必要である。歐人わ、その國語からの習慣か、餘りに冠詞を用いすぎる。Drezen の "世界語の歴史" の表紙を見る。Historio de la mondolingvo. ここに於て mondolingvo は、いわゆる reprezenta である。Zamenhof わ leono havas akrajn dentojn. と書く。しかるが故に上の表題の la わ入らぬはづである。Mi parolos pri la historio de mondolingvo. であるから上記の表題の historio の前にわ la が入るか。これわ問題である。しかし英語などから類推するにここでわ unu historia libro de mondlingvo の意味であつて la わ表題にあるが如く不要であると思ふ。かつて私わ sur stratoj de Tokio と云う句を用いた事がある。北歐のある esperantisto-verkisto わ、どうしても sur la stratoj de Tokio でなければならぬと云う。私わ sur kelkoj st-ratoj の意で用い、決して sur ĉiuj stratoj のつもりでわ無いのである。彼、是か。吾否か。ここに於て私わ esperantologoj のエスペラントに於ける冠詞の用法の研究を望む事、しきりである。私の欲するのわ一つの疑も無く冠詞を使用し得る指導原則の確立である。

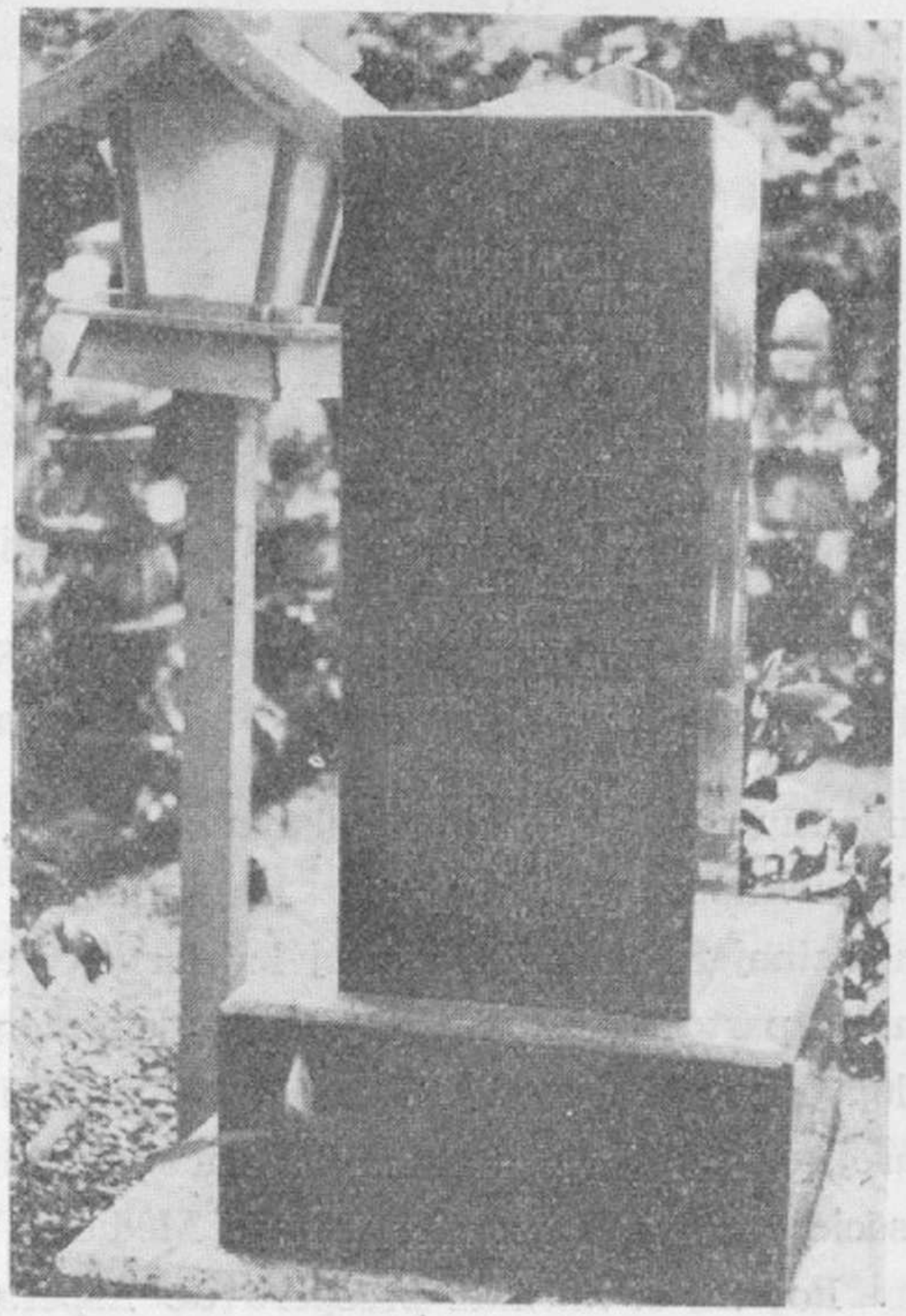
天才 Zamenhof が、かくも evoluo の可能豐かに築きあげた樂園エスペラントの內に餘りにその自由を利用すぎて ĥaoso をひき起さざる事を望むや切。

Tomboskribo en Esperanto

Masao SUZUKI

En la tombejo Iŝooĵisan (威勝寺山), Uĵi-Jamada, estis lastatempe starigata unu tomboŝtono, sur kies dorsoflanko oni legas jene :

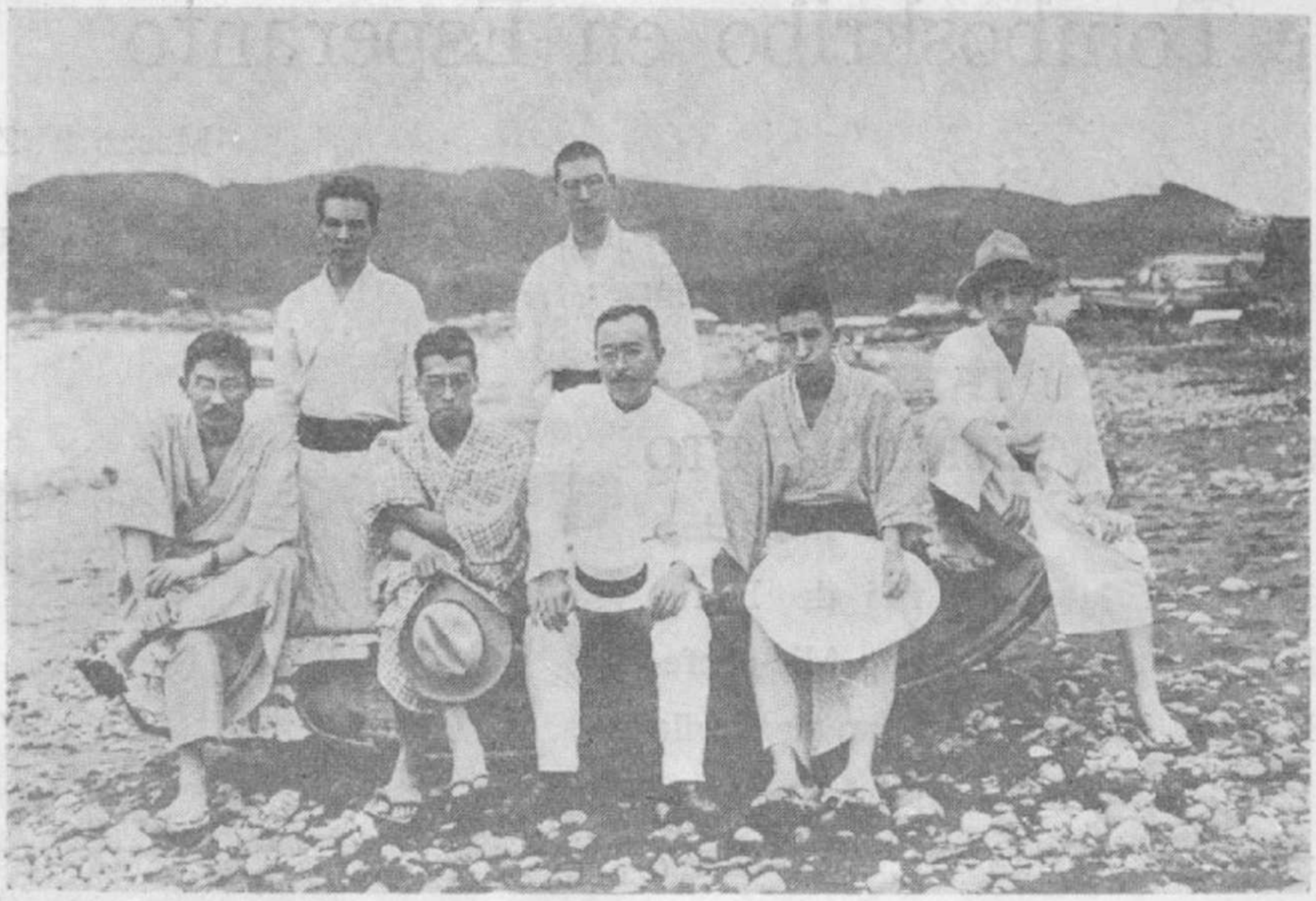
KURU TAKESI,
KURACISTO-ESPERANTISTO



Naskiĝis la 26-an de novembro 1900 kiel la unua filo de Kuru-Haruzô en Udi-Yamada, Mie-prefektejo, kaj mortis la 28-an de aprilo 1934 en Matuzaka, la sama prefektejo, postlasante al sia edzino Yoneko tri filojn kaj unu filinon. Studis en la Imperia Universitato de Tokio, kaj post la gradiĝo esploris patologion. Depost la morto de sia patro estris ĉe la Matuzaka Hospitalo kaj praktikadis ĥirurgion. Ĉiam klopodis por enkonduko de Esperanto en medicinon. Ĉefaj verkoj estas : Pri ileocekuma tuberkulozo (nefinita). Pri apendicito tuberkuloza izola. Pri tuberkulozo de miomo de utero.

Kiel oni facile vidas, dormadas sub tiu ĉi ŝtonbloko nia kara amiko, treege bedaŭrata forta batalanto en nia tendaro S-ro D-ro Takeŝi Kuru (久留威) en paca trankvilo la eternan dormon. Kiu el nia amikaro povus ekhavi eĉ unu pecon da supozo ricevi tian frapan kaj surprizan sciigon ? Vere kiel fulmotondro sub bela ĉielarko ni aŭdis ke li formortis. Al tiu, kiu laboris eĉ iomete en la tendaro de Esperanto-medicino antaŭ kelkaj jaroj, devas esti firme retenata la nomo de tiu ĉi mortinto. Mi ne povas sen fluo da larmoj kaj ĉagreno el korfundo rememori nun, kian amon li tenadis kaj kiel li klopodadis por nia sankta ideo.

Estis ja ĉe la 9-a Kongreso de tutjapana Esperantistaro (printempo de 1922), kiam mi renkontis lin por la unua fojo, kvankam ni ambaŭ estis studentoj en la sama medicina fakultato de Tokia Imperia Universitato. Tiam estis ankoraŭ antaŭtagiĝa epoko por japana Esperanto-medicino, kaj ni ambaŭ ĵuris inter unu kaj alia, sinoferi kaj klopodi por enkonduko kaj praktiko de Esperanto en nia fako. Tuj post tiu ĉi okazo sorto favoris tre bone por Eaperanta afero en japana medicino. P-ro Niŝi venis al Tokio, P-ro Ogata aliĝis, fortoj de S-roj Murata, Okamoto, Ueda kaj ni ambaŭ kunmetiĝis kaj



Bedaŭrata S-ro T. Kuru kaj medicinistoj-esp-istoj en Somera Esperanta Hejmo, okazigita de Eskulapida Klubo en Itô, Izu, 1925 [Sidantoj de dekstere: S-roj Kuru, Ura, P-roj Ogata, Suzuki, Niŝi. Starantoj: S-roj Kitaoka, Murata.]

en aŭtumo 1923 fondiĝis Eskulapida klubo, la Esperanta klubo de medicina fakultato de Tokia Imperia Universitato. Post naskiĝo de tiu ĉi klubo la disvastiĝo de Esperanto en medicinaj fakultatoj, kolegioj kaj lernejoj en la tuta Japanujo progresis tre rapide. Plej multa parto de tiu ĉi progreso, precipe en orienta duono de Japanujo, dankas al la klopodoj de Eskulapida Klubo. Ankaŭ unuopaj kuracistoj multe verdiĝis kaj post kelkaj jaroj, en 1927, Esperantistoj-medicinistoj en nombro ĉirkaŭ 700 estis unuigataj sub unu asocio nomata Japana Esperanta Medicina Asocio.

Por tiu ĉi mirinda prospero de Esperanto en medicina rondo la Eskulapida Klubo ludis, kiel supre dirite, gravan rolon, kaj funkciadon de l' klubo oni ne povas imagi sen S-ro Kuru. En ĉiuj agadoj kaj movoj de l' klubo estis kaŝataj liaj prizorgo kaj sindono. Li estis homo de forta konvinko kaj memkredo, kaj tre amis diskutadon. Li estis en diskutado ofte tiel entuziasma ke lia diro ŝajnis paradokso aŭ sofismo. Sed malantaŭ tiu ĉi ŝajna paradokso estis ĉiam rezevata vero kaj justo, kiun oni devas neniam misrekoni kaj forgesi. Tre ofte li opiniis kontraŭ surstrata propagando kaj volis konduki agadojn de Eskulapida Klubo laŭ tiu ĉi principo. Tiu ĉi principo lia ne laŭvorte signifas malaprobon de surstrata propagando, sed li volis per ĝi kontraŭi al nur vana kaj vanta propagandado forgesanta fundamentan prilaboron kaj firman kulturadon de sia propra kampo. La frazon " Fosu nian sulkon " li amegis. Kaj mi kredas, ke povas ekzisti ie iuj sulkoj, fositaj de li sed ne montritaj al ni publiko, kaj restas en malkono de aliuloj laŭ la de li amata principo kontraŭ propagando. Tiu ĉi sinteno lia influis Eskulapidan Klubon, kaj estis ne malfoftaj okazoj ke ĝia funkciado povis esti pro tio direktata laŭ la ĝusta vojo. Li estis ankaŭ unu el konsilantoj de J. E. I. kaj laboris multe por nia instituto.

Li ne verkis multe. Eble laŭ sia emo, fosi sian sulkon, li ne provis literaturan verkadon en Esperanto, kvankam li estis laŭnature sentema poeto. Kelkaj laboroj kiujn li faris, estis tradukado de medicinaj verkoj en Esperanton: precipe nomindaj

La Radikoj de l' Pino

el "Restarigo de idolo" de T. Ŭacuĵi.

trad. de F-ino Yuki ISOBE

1.

Kvankam mi loĝas en domo ĉirkaŭita de multaj pinoj, mi preskaŭ ne pripensis kiamaniere kreskas la radikoj de pinoj sub la tero. Ŝajnas al mi, ke bela ruĝbruna trunko kaj iom helverdaj pingloj puraj estas la tuto de l' pino, al kiu mi intimas delonge. Kiam pluvas, la koloro de la trunko montras al mi mildan kvietecon kaj humidan klarecon, verdaj pingloj prenas pli da delikata brilo kvazaŭ ili malsekiĝis je larmoj; kiam la suno rebrilas post pluvo, mi sentas, ke freŝa sento kiel frumatene moviĝas en la koloro de la arbo kaj sunradioj, kaj ĝojo de gemuta vivo tie dancadas; de tempo al tempo aroj da ĉarmaj birdetoj flugas inter verdaj pingloj, vivece pepante ĝojajn kantetojn —tiaj estis la figuro de miaj intimaj pinoj.

Sed iam mi havis okazon vidi komplikitajn radikojn kreskantaj subtere, starante tie, kie oni detruas sablan monteton, sur kiu pinoj kreskas. Kian grandan diferencon mi rimarkis inter la figuroj surtera kaj subtera! Unu trunko, branĉoj simple etendiĝantaj kaj agrable aranĝitaj pintoj de iliaj pingloj — kontraŭ ĉi tiuj, ĉe radikoj sub la tero, kvazaŭ post batalado, torturo, sufero kaj granda penado, sennombraj radikoj dikaj kaj maldikaj, eble pli multaj ol la tutaj branĉoj surteraj, implikiĝas kiel malordigitaj virinaj haroj, ka

---

estas "Farmakologia Praktiko" de P-ro Hajaŝi kaj P-ro Tamura[1] kaj artikolo pri rizmalsano de birdoj de P-ro Ogata,[2] kiujn li, P-ro Niŝi kaj mi triope prilaboris por esperantigi. Unu sola literatura traduko lia estas kelkaj "songoj" el "Dek songoj" de Sôseki Nacume, kiujn Eskulapidaj klubanoj tiamaj tradukis po kelkaj. Ili estas ankoraŭ ne publikigitaj.

Post lia reveno al sia hejmloko kaj ekpraktikado tie kiel hospitalestro ni vidis lin pli malofte, sed lia ekzisto kaj diskuto ĉiam instigis kaj esperigis nin en nia movado kaj neniam ni supozis, ke tiu ĉi homo de fortika staturo povus eĉ malsaniĝi. Sed sen nia ekscio malsano estis atakanta lin jam de antaŭ unu jaro, kaj subite nin frapis la anonco de lia morto. Neniu vorto, neniu frazo povas esprimi nian surprizon kaj kordoloron. Ni nur esperas lian pacan dormon en eterna trankvilo kaj ĉiaman bonfarton de liaj postlasitoj: liaj karaj edzino kaj gefiloj. Estas al ni rimarkinda fakto ke lia tombo povis porti lian vivhistorion en Esperanto. Tio estas laŭ lia dumviva volo, kaj pro la peto de l' postlasita familio la suprenotita frazaro estis verkita de mi kaj revizita de P-ro Niŝi. Ĉi tie mi prezentas kun larmoj al vi la raporton de lia morto kaj pri lia tombo.

---

1) Presita ĉe Farmakologia Instituto, Tokia Imperia Universitato, 1924.

2) Mitteilungen der medizinischen Fakultät der Kaiserlichen Universität zu Tokio, XXXII, S. 431— 60, 1925.

albrakumas la grandan teron. Mi bone scias, ke pinoj havas tiajn radikojn sub la tero, sed mi ne povis rigardi tiujn radikojn sen admiro, kiam mi vidis ilin per miaj propraj okuloj. Malgraŭ longedaŭra intimeco kun pinoj, mi neniam ekpensis pri tio, ke ili eltenas tian suferadon sub la tero. Mi aŭdis ilin dolore kriantajn, kiam ventego furiozis, kaj mi rimarkis iliajn dolorplenajn vizaĝojn, kiam sufokiga varmego daŭris pli ol unu monaton. Sed tamen, kaj iliaj vekrioj kaj velkintaj vizaĝoj ree freŝiĝis tuj post kiam la tempo forpasis, kaj malofte restis postsigno de sufero. Kaj ili neniam ĉesis subteran laboron kaŝitan de niaj okuloj. La belaj trunko kaj pingloj, kaj ankaŭ verdaj polenoj, kiuj disflugas kun maja venteto, estas donaco de tia subtera suferplena penlaborado.

2.

Foje mi supreniris monton Kooja. Kiam mi alproksimiĝis la deklivon Fudoo-zaka, mi estis profunde subpremita de nepriskribebla soleneco de japanaj cipresoj laŭvoje starantaj sennombraj. Mi estis konvinkita, ke vere ĉi tiu estas sankta monto, kaj sincere admiris saĝan konstaton de la sankta bonzo Kooboo, kiu elektis ĉi tiun lokon kiel sidejon de la ĉeftemplo de sia sekto.

Fudoo-zaka estas deklivo de kruta monto apartigata de ebena kamparo pere de ĉirkaŭantaj montaroj. La maljunaj grandaj arboj travivintaj centojn da jaroj staras direktante sin rekte al la granda ĉielo kun firma forto kaj granda potenco, kion esprmi ĝuste taŭgas la vortoj "eterna konstanteco". Kaj vigleco en arbaro premas subkaŝe la homon. Mi eksentis emocion en mia koro. Mi tuj turnis miajn okulojn al la radikoj de la malnovaj arboj. La intensa penado sub la tero klare troviĝas jam sur la tero. Kreskante sur tiu ĉi monto, kies tertavolo ŝajnas ne esti dika, por subteni la gigantan trunkon alten kreskantan la grandaj kaj fortikaj radikoj disetendas sin plej energie kaj firme ĉirkaŭbrakas subterajn rokojn, mi supozas. Kiaj estas la subteraj radikoj konformaj al tia kolosa arbotrunko? Eĉ je imago mi jam sentas admiron al la stato, ke ties radikoj komplikiĝas kun najbaraj kaj reciproke implikiĝas diversmaniere en maldika tavolo.

Vere la monto estas senmanke kovrita per penado de vigla vivforto. Ni ne povis vidi ĝin per niaj okuloj, sed tion ni povis senti per nia koro kiel ian spiritan atmosferon. Potenca premado de kaŝata penado, eĉ portante kun si ombron de mistero ekvokis profundan piecon en nia koro.

Mi hontis mian malfirman radikon antaŭ la malnovaj arboj, kaj ĵuris, ke mi koncentrigos mian energion por la subtera penlaborado. Mi apenaŭ rimarkis tion hodiaŭ, sed ne tro malfrue eĉ nun.

3.

Tiuj, kiuj volas kreski supren, devas unue enprofundigi siajn radikojn. Ne deziru nur suprenkreski! Antaŭ ĉio klopodu penetri suben.

4.

Estas tiaj homoj, kiuj tre frue ĉesas kreski supren, ĉar li malzorgis pri siaj radikoj.

Aliflanke estas tiuj, kiuj subite ekhavas belajn florojn kaj ekportas dolĉajn fruktojn, kiam li atingos la aĝon de kvardek jaroj.

Mi konas tian homon, kiu neniel volas publikigi sian penlaboraĵon, kvankam li havas saĝan kapon, senteman koron kaj plenan talenton por verki. Li nun estas subpremita de sufero vivi, kaj eĉ konsideras, ke li ne indas vivi en la mondo. Tamen tio montras la fakton, ke lia radiko nun renkontas terkruston kaj sufere penadas por trabati ĝin. Post nelonge kiam li sukceson efektivigi la trabaton, kia saltego okazos sur li!—Mi kredas lian esperplenan estontecon. El la personoj, kiuj havas firman radikon, neniam devas naskiĝi mizeraj fruktoj.

5.

De antikva tempo granduloj penadis kulturi imponan radikon. Tial ju pli ni gustumas iliajn faraĵojn, des pli ni ĝuas senliman bonguston.

Nuntempe, kvankam oni ne forgesas prizorgi pri siaj radikoj, ĉu oni ne faras tiel malgrandan taskon kiel en florpoto? Kiamaniere oni povas kulturi kreskaĵojn de kuriozaj specoj?—aŭ kiel oni povas rikolti fruktojn en laŭmende fiksita tempo?—ĉio estas tro artefarita. La radiko, kiu kreskis delikate en malgranda grundo, ne povas libere etendi siajn membrojn, eĉ se ili estos transplantitaj en dikan grundon.

Tial granda ambicio, kiu traborus la ĉielon neniam naskiĝas el malkuraĝigita radiko. Ni do pripensu, ke estimo al grandiozaĵoj devas esti samtempe estimo al grandaj radikoj.

6.

Se ni povas, por niaj radikoj ni devas elekti riĉan grundon.

Se ni povas, por niaj fruktoj ni devas elekti sterkon taŭgan nutri radikojn.

Estas grava devo de edukado, precipe de la universitato, inspiri pasion flaman al radikoj, sciigi kie estas riĉa grundo, kiun la radikoj instinkte preferas, kaj provizi tiujn radikojn per nutraĵoj, kiuj estas konservataj en la tero de miloj da jaroj.

Ĉu universitato nur utilas kiel florpoto aŭ ne—estas ne la problemo de sistemo, sed de personoj. Kia ajn reformo de sistemo restos senefika, sub tia administratoro, kiu ne komprenas altan valoron de la grandaj radikoj.

7.

Eduki estas kulturi. Por ke ĝi estu efika, antaŭ ĉio oni bezonas radikojn, kiuj klopodas penetri en la grundon de la homa vivo.

Ĉu oni ne forgesas tro ofte esencon de la radiko? Eĉ se oni multekostan nutraĵon donas, ĝi efikas por nenio tie, kie mankas kapableco ĝin digesti. Mi ne pensas, ke ŝanco kaj materialoj por kulturo mankas al ni. Mi nur timas, ke la radikoj konformaj al ili estas tro malgrandaj kaj malfirmaj.

Koncentrigu vian tutan atenton al via radiko. (*Fino*)

POR SERĈI LA TREZORON (II)

Originale verkita de F-ino Cuja TADA

II

Novjaro venis. Sed mi ne povis viziti ilin pro okupiteco de mia hejma afero. Mi skribis al ŝi, ke mi en Februaro ŝin vizitos. Verdire, mi estas decidinta, ke mi nepre vizitu ŝin ankoraŭ unu fojon, ĉar ŝajnis al mi, ke la sinjorino precipe min amas pli ol aliajn. En la festotago de Februaro, frumatene mi sola ekveturis al la intermonta loko.

La montara stacio jam estas en neĝo, maldense sternita. Kun sia aŭtomobilo sinjorino Jamada estis min atendanta. Ŝi veturigis ĝin kun mi. Ondiĝoj de montoj, kiuj estas kovritaj de maldensaj neĝoj, forflugis malantaŭen. Preterpasinte du vilaĝetojn kun kelkaj dometoj,... ĉi tie jam ni ne renkontas eĉ unu solan homon. Ĉirkaŭaĵo estas tute kvieta. Pinto de suprestaranta monto post la montara ondiĝo orkolore brilas de sunradioj. La veturilo venis apud la rivero. Kaj ni alvenis al la loĝejo.

Mi estas kondukita en japanan ĉambron. Antaŭ mia ĉambro estas korto. En ĝi fontano ŝprucas. Ŝtona lanterno kaj malgrandaj plantoj troviĝas. Ekstere estas iom malvarmege. En vintro kampa laboro ne estas multa, kaj S-ro Jamada preskaŭ tutajn tagojn pasigas en la domo. Li estas naturhistoriisto, kaj ankaŭ bona farmisto

Estas posttagmezo de ĉi tiu tago. Ni tri sidas en laboratorio de S-ro Jamada. Neĝa rebrilo envenanta tra vitraj pordetoj lumigas internon de la ĉambro, hele, ĝis tiom, ke ĝi vidiĝas pala. Grandaj ŝrankoj kun vitraj pordetoj; en tiuj, kestoj da specimenoj kaj boteloj estas internigitaj. Sur granda tablo, diversaj instrumentoj, kiujn la sinjoro uzas por sia eksperimento, kviete, orde sidas unu apud la alia, kaj trenas sian grizan projekcion sur la tabla ebenaĵo. Ia odoro, ne esprimebla, pleniĝas en la ĉambro. Por mi estas la unua fojo, eniri en ĉambro kun tia impreso. Tamen, skarlata koloro de kanapo, kiu estas metita sub fenestro de orienta flanko, vidiĝas speciale, alloge milda en ĉi tia ĉambro, malvarme impresa. En okcidenta muro estas komeno, kaj super ĝi estas pendigita granda portoreto de maljuna alilandano. Mi aŭdis, ke la maljunulo estas eminenta naturhistoriisto en Francujo, sed mi forgesis la nomon.

Mi jam de kelkaj horoj aŭskultadas parolon de S-ro Jamada. Komence, mi opiniis, ke li eatas tro serioza, kiu ofte ne ridas, sed... La sinjorino min kondukis al la laboratorio, dirante: li montros al vi belajn specimenojn de insektoj." Kaj dum mi aŭskultadas de li pri mirindaj vivadoj de insektoj kaj interesa kreskaĵa mondo, mi tute ekŝatis la "rakonton pri faktoj", Kaj anstataŭ tio mi eahavis opinion, ke novelo kaj rakonto estas tute malinteresaj, kvankam ĝis tiam mi ŝatis ilin. Jes "rakonton pri faktoj", tiel la sinjoro diris. Novelo estas artefarita rakonto, sed rakonto pri insektoj aŭ kreskaĵoj estas realaĵo. Kaj, ĉi tiu tute ordinara "rakonto" tre plaĉis al mi. Se mi notus lian tutan parolon, mi povus fari interesajn utilajn librojn. Se li tiamaniere

ankoraŭ daŭrigus la parolon, ni ne scius kiam finiĝus la parolo. Ja tiamaniere la gesinjoroj pasigas tagojn kun multaj senfinaj interesoj.

Dum lia parolo, la sinjorino ĉiam ridetas. Levante fajrojn en kameno, aŭ verŝante teon, de tempo al tempo ŝi kapjesas al li, aŭ profunde aŭskultas kiel sola aŭskultanto

Tra fenestroj ni vidas sufiĉe vastan ĝardenon. Ĝi nun estas kovrita de neĝo. Sed kiam venos printempo, sur la tuta ĝardeno kreskos diversaj herboj, naskiĝos diversaj insektoj. Kaj por li tre okupita, sed tre interesa tempo komenciĝas. Per sonetoj de insektaj flugiloj, per etaj burĝonoj li ekscias eternan Dian volon. Kiam li rigardadas dum kelkaj horoj, kaŭrante sur vojeto de la ĝardeno, en verŝado de sunradioj, en vaporado de odoro de junaj herboj, li estas pli multe, pli korekte instruata de herboj aŭ insektoj ol de dikaj libroj. . . ĉi tion li ĵus diris al mi.

Trans la ĝardeno vidiĝas ebenaĵo, grize nuancita al monta taluso. Jam vesperiĝo ne estas malproksima.

Post la vespermanĝo mi petis al li pluan parolon.

Li parolis pri vulkanoj en Italujo kaj suda oceano; kaj ankaŭ romanojn de ekspedicioj, provitaj al Suda Poluso kaj al Everesto. Li ankaŭ al mi instruis stelarojn, kiujn ni povas vidi en nokto de lastaj tagoj.

De la vespero ree ekfalis neĝo. Iom malfrue mi diris " bonan nokton " al ili, multe bedaŭrante, ke horoj tro rapide pasas por mi. (*Daŭrigota*)

INFANA ĜOJO

de William Blake

Elangligis M. OOTANI

'Ne havas nomon mi;
Du tagojn nur spiradis mi.'
Per kia nom' mi voku vin?

'Feliĉa estas mi.
Nomata estas ĝojo mi.'
Dolĉega ĝoj' alvenu vin!

Agrabla ĝoj' beleta!
Dolĉĝoj' du tagojn maljuneta.
Dolĉĝojon mi alnomas vin.

Rideton faras vi,
Dum kelkatempo kantas mi,
Dolĉega ĝoj' alvenu vin!

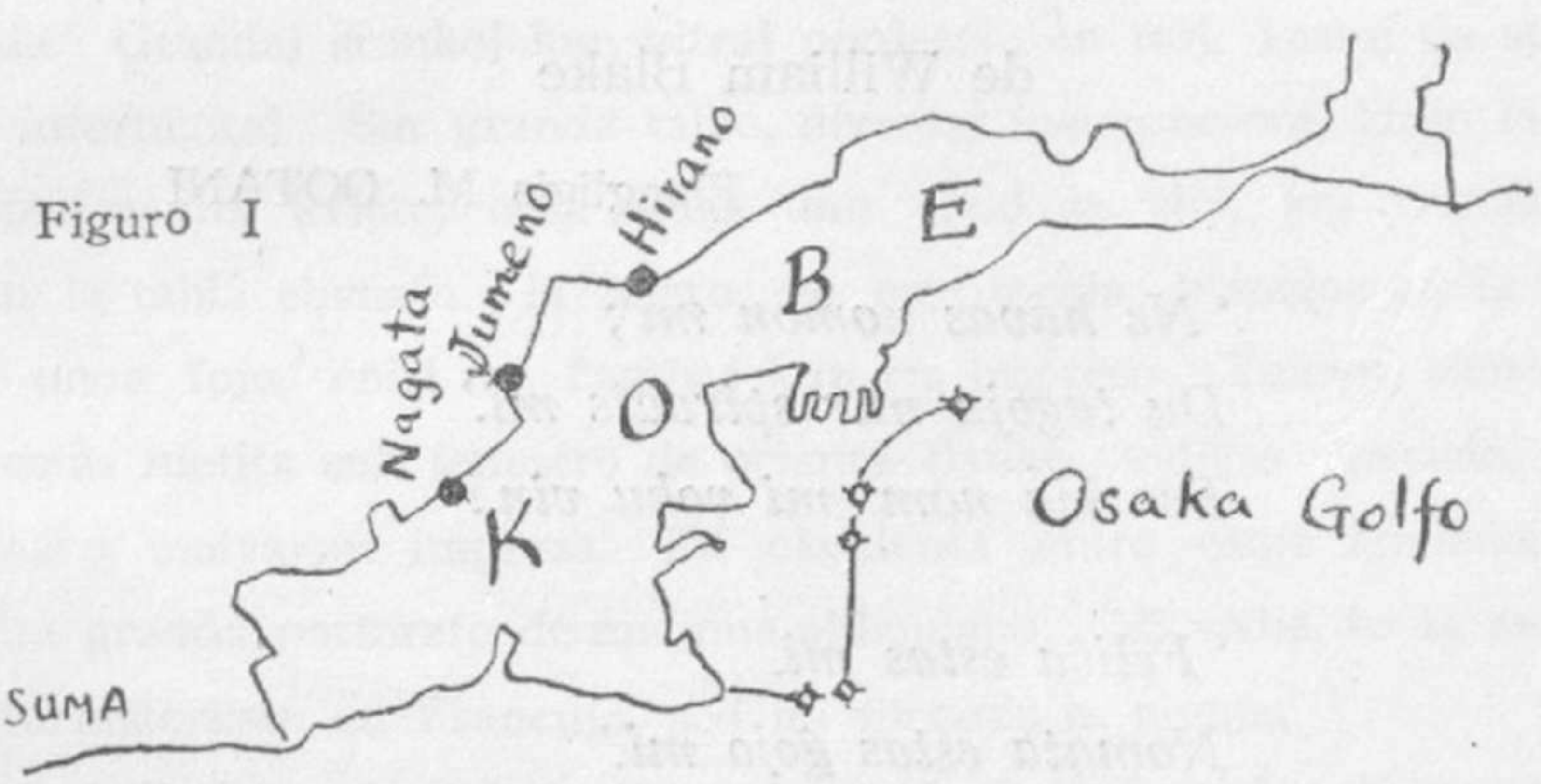
Moskitvualo sub la Fenologia Vidpunkto

T. Taguĉi, *Mara Meteorologia Observatorio,* Kobe

Atakoj de moskitoj somernokte tre ĝenas min, sed la unua nokto, en kiu mi komencis uzi moskitvualon, ĉiam donis al mi iajn freŝan kaj somerecan emociojn. Kaj samtempe la emocioj senkonscie notigis al mi la daton de la ekuzo de moskitvualo en miaj taglibroj ĉiujare. La unuaj datoj ĉiujaraj estis jene:

Jaro	Dato
1923	14, Junio
1924	17, Junio
1925	11, Junio
1926	8, Junio
1927	10, Junio
1928	6, Junio
1929	14, Junio
1930	9, Junio
1931	22, Junio
1932	13, Junio
1933	28, Junio
1934	10, Junio

Figuro I



Dam la tuta tempodaŭro, mi loĝis en Kobe'o sed la stratoj estas ne samaj: dum 1923–1927 en Nagata'o, 1928–1932 en Jumeno'o kaj 1933–1934 en Hirano'o.

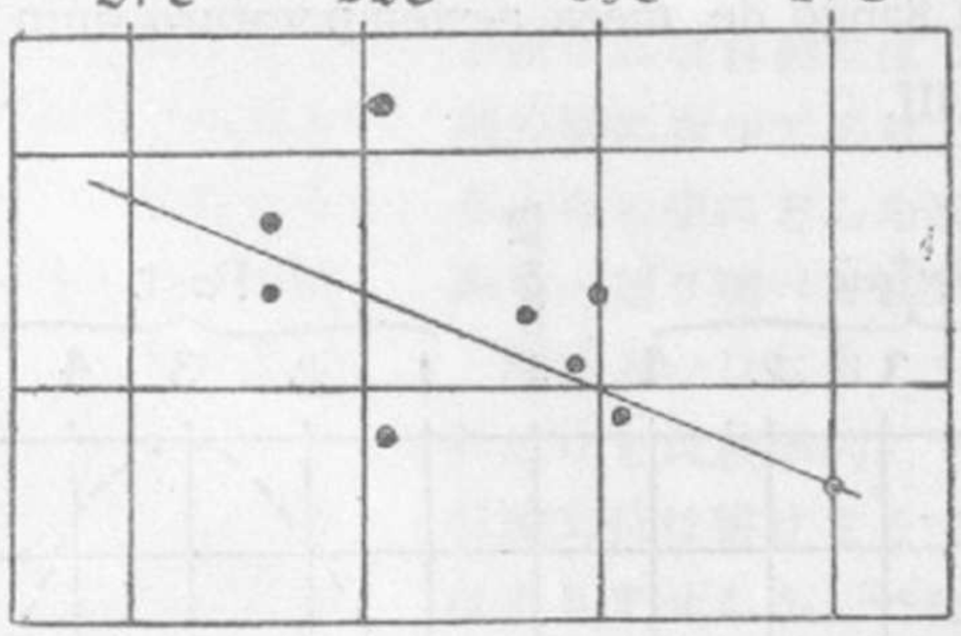
Komparante la meztagojn de la unuaj datoj en tiuj lokoj, mi povas rimarki ke la meztagoj en Nagata'o kaj Jumeno'o estas preskaŭ samaj sed malfruiĝas rimarkinde en Hirano'o.

Tiu ĉi diferenco kredable devenus de la specialeco de la loko; nome tiutempe Nagata'o kaj Jumeno'o ankoraŭ havis vilaĝecan karakteron, kiu multe helpis la generadon de moskitoj, kompare kun Hirano'o.

Nun mi havas neniom da scio pri la influo de meteorologiaj elementoj por la generado de moskitoj sed el nuna studo, mi povis observi ke la rilato inter la unua dato de la ekuzo de la vualo kaj mezmaksimuma aertemperaturo en majo estas iom rimarkinda. (Ili havis la korelativan koeficenton je −0.55)

Mi prezentis la rilaton en Figuro II kaj Tabelo I.

Figuro II



Tabelo I Mezmaksimuma aertemperaturo. (°C)

Jaro	la dato de ekuzo	Mezmaksima aertemperaturo en majo (C)
1923	14, Junio	23.0
1924	17, 〃	21.6
1925	11, 〃	22.9
1926	8, 〃	22.1
1927	10, 〃	22.0
1928	6, 〃	24.0
1929	14, 〃	21.6
1930	9, 〃	23.1
1931	22, 〃	22,1
1932	13, 〃	22.7

§ i: Temperaturajn materialojn mi prenis el la raporto de Kobe Meteorologia Obserbatorio.

§ ii: En nuna verketo mi esceptis la materialon en Hirano'o pro la speciala karaktero.

Figuro I montras al ni ke en majo oni havas ju pli altan mezmaksimuman temperaturon, des pli frue oni povas komenci ekuzi moskitvualon en sekvanta monato. El la rilato ni povas derivi la eksperimentan formulon sekve:

$$Y = 102 - 4X,$$

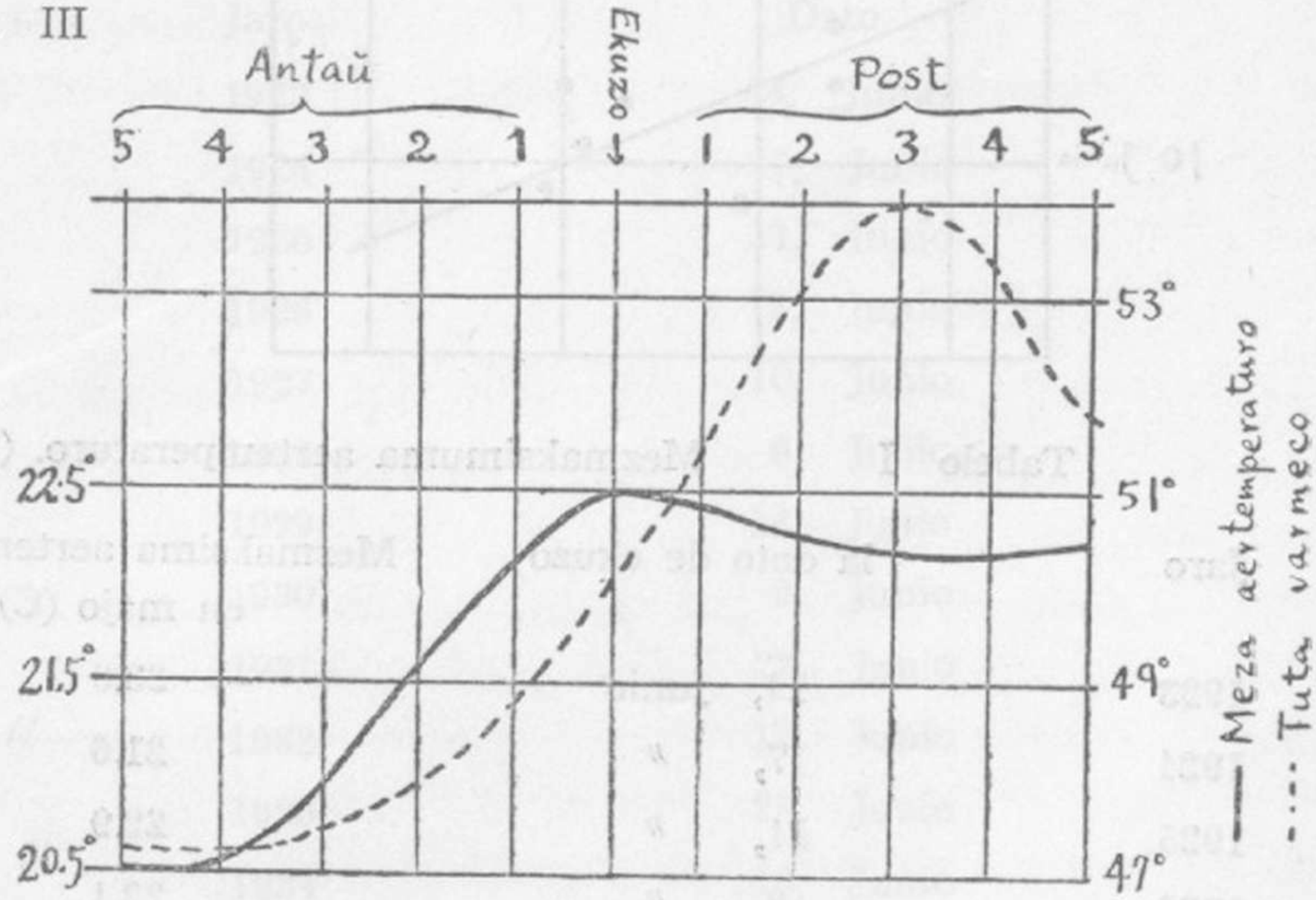
Kie Y estas nombroj de tagoj, de la 1-an de junio ĝis la unua dato de l' ekuzo de moskitvualo kaj X estas mezmaksimuma aertemperaturo (C) en majo. La diferenco inter la observitaj kaj kalkulitaj tagoj, el la formulo estas (±) 2.8 tagoj en mezo.

Ĝenerale ni povas pensi du motivojn pri la ekuzo de moskitvualo; 1) en la okazo kiam moskitoj tiel multiĝas kiel mi ne povas dormi libere sen vualo, 2) en la okazo kiam moskitoj ne tiel multiĝas efektive, sed ni preferas dormi en la varmego, per la maniero, malfermi pordojn aŭ senvestiĝi kaj fine ni necesas protekttilon kontraŭ la fiinsekto.

Do el la supra supozo, mi antaŭobservas ke la unua nokto de ekuzo havus ian specialecon pri la temperatura ŝanĝo.

Jene mi montras la ŝanĝo de meza aertemperaturo dum kvin tagoj antaŭ kaj post la unua dato, en Fig-o III.

Figuro III



La rezulto sciigas al ni ke ekuzo komenciĝas ĉe la plej verma tago en tiuj ĉi dekunu tagoj kaj la tago sintrovas ĉe la rimarkinda transira punkto pri la maniero de la ŝanĝo

La varmeco kaj la malvarmeco, sentata de nia percepto, ne dependas simple de la alteco de aertemperaturo. Temperaturo kaj humideco de aero funkcias grave al ni.

El tiu ĉi pripenso, W. Knoche* kondukis sekvantan formulon de tuta varmeco, kiel esprimaĵo de varmeco kaj malvarmeco.

$$A = t + \frac{f\,(606.5 + 0.305\ t)\ (273 + t)\ 760}{0.2375 \times 1000 \times 1.293 \times 273\ b}$$

A = tuta varmeco (°c)
t = aetemperaturo (°c)
f = mezo de akvvaporo en 1 kuba metro de aero
b = aerpremo

Mi kalkulis la tutan varmecon laŭ Knoch-a formulo pri la dekunu tagoj kaj la rezultaton alskribis en Figure III.

Precize, la unua dato havas iom trovarmeco sed en ĝenerala kondicio de la ŝanĝo, sintrovis kelkaj tritagoj antaŭ la maksimuma punkto.

* W. Knoche: Aus d. Archiv. d. deuschen Seewarte. No. 2. 1905.

隱 語 漫 談

——Ŝercparolo pri Slango——

Jukio ONODA

エス語も最近段々と、獨り文藝科學のみならず總ゆる實用的方面に用ひられる樣になつて來ました事はお互に喜ばしい事で、私共も運動のし甲斐があると云ふもので御座います。又其れに伴つて各方面の術語も着々と研究されつゝある樣に見受けますし、エス界の百年の後を惟ひ心強く感ずる次第であります。が、さて此處に已に論ぜらるべくして未だ論ぜられなかつた問題に隱語と云ふのがあります。隱語、結構ですな。何となく獵奇的で身中がぞくぞくするではありませんか。ヨタモン共には限り無い魅力です。だからと云つて私をエンコのヨタモンか、テキヤの兒分か等とお考へ違ひをなさつてはこまります。兎角此の樣な問題を詳しく論ずると、あいつは一風呂あびて來たんぢやないか、ブタ箱位は這入つた事があるんぢやないかと色目がねで見られる虞があるので幾分躊躇するのですが、今は學の爲、エスペラントの爲と云ふ悲壯な決意の下にそんな安目がねには催涙彈でもブッぱなして、ズバズバ云つてのけてゆく事にします。

今日のエス語にはほとんど隱語と云ふものは無い樣ですな。この點から云つてもエス語は最も klara な言葉だと云へる譯です、が其の反面 naiva な事も否定出來ませんね。隱語は決して社會機構の缺陷から發生するものではなく、實に人間の秘密性から由來するのです。ですから一點の穢れも惡もなかつた大地の上の lazura ĉielo の下の Adamo と Evo の間にも「秘密」はあつた譯で、其處に隱語も亦必要を感じた事でせう。故に隱語は「アダムより人類と共に」です。どんな國語にも隱語の無い語等と云ふものはありますまい、然し私は今、總ゆる自然語に隱語と云ふものはあるから人工語のエスペラントにも此れを導入する事が必要だ等と云はふとするのではありません。隱語は人間の秘密性から由來するのであるから、今でこそ未だ無いがエス語がこの少年期（エス語はもう一人前の大人だなどと思つてをられる方があつたら恐るべき誇大妄想患者ですぞ）を脫すれば自然にぼつぼつ用ひられて來る、其の時になつてあはて騷いでもおつかないから、今の中にどんな形式で現れるものであるかを一通り調べて置かうと云ふのです。

隱語と一口に申しましても仲々廣くて、これだけを民族學的にでも專門に研究しても學位論文位は書けさうです。どなたかなさる方はありませんか。で此處には隱語の代表的なもの、卽ち犯罪者隱語に例を限ります。先づ隱語がどうゆふ變裝形態をとつてゐるものであるかと云ふ事に就いては私が「隱語の形態と其の分類」と題しまして雜誌「精神分折」(II, 5) に多くの例を揭げたものがありますがそれに依ると——もつとも此れは日本の隱語だけに就いての話しですが——一番多いのが比喩に依るものです。蚊帳を「逆さ袋」と云ひ、傘を「一本足」と云ひ、坊主を「蛸」と云ひ、刑事を「犬、猫、隼、鼬」等と云ひ、土藏を「娘」と云ふ等が此の類で、西洋の隱語形式も多くは此の流儀のものゝ樣に見受けます。で、エス語でも隱語を造るとならば多くは此の形式に依るべきでして、例へば、internacie に通ずるであらうと思はれるものを造つて見れば、

domo＝virino (Domo estas la simbolo de virino.)
doto＝manĝaĵo, kiun ŝtelisto alportas al gardohundo por nebojigi
belulino＝ora monero
hundo＝spiono, detektivo
vesperto＝ŝtelisto, kiu subeniras domon en vespero
kato＝detektivo
bambuido＝kuglego
serpento＝ŝnuro
indiano＝kupra monero

nesto＝domo, hejmo
stiko＝unu
karbigi＝alfajrigi
elhospitaliĝi＝elveni el malliberejo
korno＝bovo, bovaĵo
dormigi＝mortigi
okulo＝fenestro
buŝo＝pordo
vojaĝi al fremdlando＝eniri en malliberejon

次は事物の表はす性質や事柄や音や色等の中の主なものの一つに依つて全體を代表せしめると云う形式で、例へば「石の下」と云つて漬物を意味し、「透(スカ)し」と云つて障子を意味し、「ガチャ」と云つて制服巡査を意味する等が此の類です。

travideblo＝vitro　ruĝo＝sango
brilo＝ponardo　nigro＝nokto
blanko＝tago　nigreto＝krepusko
malfermi＝konfesi　flavo＝ora monero

次は人口に膾炙した諺、歌、物語り、芝居の筋、歴史上の事件等よりの轉化に依るもので、「安達ヶ原三段目」、「浦里」、「お七」、「金時」、「定九郎」、「薩摩守」、「七段目」、「俊寛」、「自來也」、「師直」等と云ふのが此れで日本の隱語には仲々澤山有ります。エス語で此の形式を眞似るとすれば次の樣なものでせう。

Zamenhof＝esperanto　Hamleto＝fantomo
Bofrono＝perfidulo　Jungo＝teo
Gangio＝nemanĝado　Noao＝ŝipo

次は字謎的なものですが、これこそは日本語獨特のものでエス語に應用は一寸困難です。例へば「五(グ)二」＝質(七)屋、「眼水(ガスイ)」＝涙、「大無人」＝一、「分無刀」＝八、「六字」＝死亡等の樣な類です。强ひて眞似るとすれば、

montri senmone＝tri
almenaŭ sen almeo＝naŭ
alfabeto＝abocanto
nun inverse＝unu

次は、財布の事を「サイ」と云ひ、關係があるを「カンガアル」と云ひ、氣付くを「ヅク」と云ひ、横濱を「ハマ」と云ひ、拘留處分を「リユウ」と云ひ等する樣に音の一部を略す形式で、此れをエス語に應用すれば、

aŭto＝aŭtomobilo　buso＝omnibuso
foni＝telefoni　nujo＝monujo
zino＝edzino　licano＝policano

最後は音の逆轉に依るもので、例へば「エンコ」が公園、「グドウ」が道具、「サンタク」が澤山、「ジケイ」が刑事、「ジケン」が檢事、「ナオン」が女、「ドマ」が窓、「リユウコ」が拘留等の類です。これも日本語獨特のものと思はれますが、又エス語に應用してみますと

ĉovo＝voĉo　divi＝vidi
fapi＝pafi　ked＝dek
namo＝mano　nozo＝zono

と云ふ樣な鹽梅です。しかしこれは誤解をおこしやすいですからあまり感心しません。

實を申しますと、此の他にまだ逆表現と云ふのが有るのですが數は極わづかです。例へば「眞蹟」と云つて贋物を意味する等がこれで、エス語に應用するとすれば、

verajo＝malverajo　liberejo＝malliberejo

以上で一通り隱語の形式はお話しした事になります。次に最近東洋新語製造株式會社(所在地不明)と云ふ處から發賣になつた品を並べて置きますから御自由に御覽下さい。

boo 仲間、身內　diso 釋放
eko 初め、初犯　ekso 前科
geoj 夫婦、戀人同志　malo 惡事
prao 時効　reo 再犯
vico 拘引　aĉo 不良性
ado 常習　aĵo 盜品
ano 巡査　aro 群盜
ebla 忍び込み可能な　eco 大人しい性質
ego 强盜　ejo 繩張り
emo 手癖　ero 貨幣
eto 竊盜　ido 兒分
igi 殺す、バラス　iĝi 死ぬ
ilo 盜賊用道具　ino 淫賣婦
inda 忍び込む價値ある　ingo 錠前
ismo 神佛　isto 神佛信者
oblo 博奕　ono 分ケ前
opo 共犯　ujo 蟇口、トランク
ulo お人良し、ポツト出　umo もうろう
eliĝi 出獄する　eniĝi 下獄する
subi 萬引する　transi いさばする
superi カツぱらふ　eksulo 前科者
malulo 犯人　aĉulo 不良、ヨタモン
eculo おとなしい奴　opano 共犯者
ilujo さんや袋

さて諸君！如何がです、此等を用ひて dike mallonge 世界を股に。いやこれは失禮。

Enciklopedio de Epseranto, Vol. I[1] について

J. Okamoto

1933 年度 AELA の配本の一として出版さるべき筈であつた Enciklopedio de Esperanto はやつとその第一巻が本年六月に完成した。第二巻は目下印刷準備中である。辭典と稱せられるものである以上相當の日子を費さねば出來上らぬことは當然の事である。

本百科辭典の基礎はロシヤの牧師I. Ŝirjaev が長年苦心して蒐集したものである。併し一人の手になつた原稿は特に各國の運動史その他の點に於て一人の手になつたものは役にたたぬことが多い。川崎氏がとりよせたŜirjaev の日本に關する原稿などもいろんな雜誌にでた宣傳運動の raportoj のよせあつめにすぎなかつたとの事である。此の一事からみてもあとのことはおしてしられる。

Literatura Mondo でもこの原稿のまま出版するのが氣がひけたので各國の知名エスペランチストに協力をもとめてそれらの原稿にすつかり手を加へ又書きあらため書きたして編輯することにしたのである。各國の協力者が方々へだした問合せの手紙の郵税だけでも總額 800 sv. fr. にのぼるといつてゐる。

上下兩卷を通じて 1500 名の全世界知名のエスペランチストの小傳をのせ 450 の有名なエスペラント書籍の解題をのせたとのべてゐる。

第一卷は見出語 A から Ĵ までを収めたもので再版本文 272 頁と寫眞頁 112頁(寫眞個數 293) をもつたかなり尨大なもの。日本の部は原稿が間にあはなかつたので Japanujo の部に入れず Nipono なる項目をおいて第二卷へ入れることになつたことは第一巻Antaŭparolo 第三頁に斷り書がついてゐる。

第一巻は後 1100 個の項目について書いてゐるとの事。

本書は大體各國別のエス運動小史(數頁宛費してゐる――フランスの部等 17 頁も費されてゐる) と各國の知名エスペランチストの小傳と有名なエス書の解題とをその主要な根幹としたものである(すべて ABC 順によつて排列)。

その外エス運動上注目すべき事柄について敍述し且エス語の語學方面の temoj についても描述してゐる。この最後の語學的部分については Kalocsay が專ら筆をとつてゐるが併しそうでないものもある。例へば Evoluo de Esperanto, Ido kaj Esperanto 等の項目については故 Grosjean-Maupin 教授が書いてゐる。

各國知名エスペランチストの姓名のよみ方が仲々六ケ敷のであるが本辭典ではその近似音を esp. ortografio (多少の modifo を加へ) で示してゐるので大變便利である。

日本人としては粟飯原晋、淺井惠倫、秋田雨雀、出口王仁三郎、藤澤親雄、速水眞曹、堀眞道、飯田雄太郎、井上萬壽藏、石黒修、岩下順太郎、伊藤榮藏、伊藤德之助、伊東三郎、安田房吉、由里忠勝の諸氏の名がでゝゐる。

猶原稿が間にあはずして Suplemento に入る人は 淺田(榮次)、露木、江口、速水、林(好美)、原田素軒、長谷川(理衞) の諸氏だときいてゐる。

日本の部の編輯については本誌前々號川崎直一氏の原稿をみられたい。

特にエス運動に接するものにとつて本書は非常に便利な百科辭典である。勿論多少の誤植と多少の事實の誤記等はまぬがれないとしてもこれだけ澤山の項目を網羅し手ぎわよくまとめあげた點をかつてやるべきである。特に寫眞の取捨配列は實に redakto の幼稚そのものをバクロしてはゐるにしても)。

エス講習を gvidi される様な方々はぜひ一本をそなへられるがよいと思ふ。

1) Vol. I (A—Ĵ), Redaktis L. Kökény kaj V. Bleier. Kunlaborantoj 107 esp-istoj en multaj landoj. 272 tekstopaĝoj. + 112 bildopaĝoj. 23×15 cm., Eldonis Literatura Mondo, Budapeŝto.

第 26 回萬國エスペラント大會記

去る8月4—11日ストツクホルムで

エス語版トーキーの完成

來年度大會はローマ再來年度はウイーンで

北歐の大國スエーデンの首都 Stokholmo で本年度萬國エス大會が去る8月4—11日開かれた。

參加者二千名に達し仲々の盛會であつた。

隣國ノルウエーの首都 Oslo に於て8月2日に antaŭkongreso があつた。

次に同大會の模樣を例により報道する。

第1日（8月4日）

18時 Koncerta Domo の大ホールに於て發會式。

昨年の Köln 大會の kongresreĝino S-ino Manjo Gernsbacher が立つて第26回大會の開會を宣し役員を次の如く指名した。

名譽會頭 rektoro Jansson；會頭 advokato Julin；副會頭 Dahl, Steiner, Kempeneers 博士、Robertsson, Pitlík 博士、Carlsberg, Spiess 孃、Helmi Dresen 夫人、Setälä, Bastien 將軍、Walther, Loyola 博士、Cabesa, De Szabó, Canuto 博士、Libers, Kazlauskas, Baas, Bugge-Paulsen, Bujwid 教授、Morariu の諸氏。書記長 Kreuz；書記 Malmgren. 書記補 Søderberg 博士。

大學總長 Jansson 氏がたつて名譽會頭を受諾の挨拶をなす。

次いで Stokholmo の ĉefguberniestro Torsten Nothin 氏の祝辭（Dahl 氏通譯）あり。

次いで Jansson 氏が會頭として挨拶をした。

La Tagiĝo の合唱の後 UEA の會長 Stettler 氏の挨拶。つづいて各國政府代表者の挨拶あり。F-ino Lidja Zamenhof の挨拶あり。

この次の部分から發會式の狀況がラヂオによつて放送された。

各國の landaj asocioj の代表者の挨拶あり。この大會には日本から一人の出席者もなかつた樣である。近年珍しいことである。

代表者の挨拶の途中 Edmond Privat 博士が Lau anne の放送局より無線電話で大會に對して挨拶をおくつたのを當地放送局でうけたものを場內の擴聲器で參加者に聞せた。

ついで各國 reprezentantoj の salutoj の續きがあつて 21 時 La Espero によつて會式をとぢた。

21時から Granda Hotelo で吉例の interkonatiĝa vespero が祝賀晩餐會の後ひらかれた。

第2日（8月5日）

Storkyrkan (Granda Preĝejo) で Protestanta diservo があり subparokestro Algot Törnquist のエス語の御說教あつた。

Sankta Eŭgenio 教會では katolika diservo があり同樣 pastro Arrigo Bajetti のエス語說教があつた。

午後埠頭に集合 Saltsjöbaden へ船遊び。

晚は Koncerta Domo で muzikdirektoro D-ro Hugo Alfvén の指揮の下に音樂會あり大會參加者の耳目をたのしましめた。

第3日（8月6日）

10時 Somera Universitato が國會議事堂の第二 salono で開かれた。

Rektoro Sam Jansson 司會。

Prof. Migliorini（ローマ大學教授）の「Pri personaj nomoj」の講演。

Prof. W. E. Collinson（リバプール大學教授）の「La nordeŭropaj lingvoj kaj Esp.」の講演。

正午ストツクホルム市當局の公式接見があり市參事會長 Knut Tengdahl 氏が挨拶し (Einar Dahl 氏通譯) UEA の Stettler 氏が一同を代表して謝辭をのべあと饗應にあづかつた。16時に Prof. V. Langlet の "Kion oni devas rigardi en Svedlando" の Somera Univeasitato の第三講演があつた。この日 Kristana Esp-ista Ligo Internacia の分科會やエス學士院及言語委員會の會合やラヂオや TAGE の分科會があつた。

晚は Oskar 劇場でエス語劇を上演、會場手狹のため二班にわかれた第二班は第5日に觀覽することになつた。

出し物は Strindberg の "Leka medelden" (Ludi per fajro) と Molière の "Le mariage forcé" (Edziĝo deviga) との二喜劇。

Sandro Malmquist 氏の舞臺監督の下に狼

期以上の好成績を收めた。

第4日（8月7日）

UEA の laborkunsido（別項參照）ありその外に ILEPTO, ISAE, TEKA, UEA の Komitato, Esp. Akademio 等の分科會があつた。又 Somera Universitato の續きとして Carl Lindhagen 氏の "Mondproblemo kaj internacia lingvo" の講演及び Björn Collinder 教授の "Vivo kaj moroj de la laponoj" の講演があつた。

晩に Skansen の博物館を訪問しそこで同館について Sam Owen Jansson の講話及びエストニヤ、フインランド、オランダ、ポーランド、スエーデン等の popoldancoj の實演があつた。

第5日（8月8日）

UEA の Dua laborkunsido（別項參照）があつた。

外に TEJA (Junulara), TAGE, KELI (kristana), Kooperativa Esperanto-Ligo, UDEV (virina), ILEPTO (poŝta), Esp-Institutoj k Ekzamenaj Komisionoj 等の分科會があつた。

Somera Universitato としては Rolf Nordenstreng の "Sveda popolo laŭrase" 及び Vilho Setälä の "Pri fotografado kiel arto" があつた。

第6日（8月9日）

Uppsala 市へ遠足。

市内見物。有名な Uppsala 大學訪問。

Stokholmo に18時20分歸着。

20時から "Vespero de literaturo, arto kaj amuzo" の催あり。

Källbeg 氏の violo, Dorkas Norre 孃の fortepiano, Olle Björling Folke Jonsson 兩氏の歌、T. Morariu と Margit Gustavsson 兩氏の deklamoj があつた。エス語の文學作品としては Kalocsay, Zahariev, R. Schwartz, Szilágyi 等の人々のもの。Einar Dahl 氏の幻燈付の "promenado tra la ĝardeno de la Esp-literaturo" は大いに聽衆を笑はせた。

第7日（8月10日）

Esp. Turismo, maristoj kaj ŝipkonstruistoj, UEA-komitato, bahaanoj, vegetaranoj, abstinenculoj, pacifistoj (UPL) 等の分科會があつた筈。

Somera Universitato としては本日は B. Beckmann 博士の "Dalekarlia revolto", Fr. Szilágyi 博士の "El la hungara literaturo: Madách", O. Bannbers と S. O. Jansson 兩氏の "Vivo de svedaj kamparanoj" V. Musella 教授の "La Infero de Dante" の講演があつた。

Jean Forge (Jan Fethke) 氏の努力により始めてエス語のトーキーがつくられたものの映寫があつた。（勿論トーキーといつても數分の短いものはこれ迄にもなかつたわけではないが今度の樣な普通のものはなかつた）勿論このトーキーはもともとドイツ語の物でそれにエス語の錄音をしたものである。

話の筋は殺人の罪を犯し5年間獄舎にあつた男が自由の身となつて歸つたが妻にもあへずいろいろなやむが遂に feliĉa fino で局をむすぶものとの事。

このトーキーを見たトーキー配給商會の人々がこれをスエーデン全國で映寫せしめようと目下努力中との事である。日本へでもくればいいがと思ふ。

第8日（8月11日）

大會會頭 Teodor Julin 氏の司會の下に閉會式が行はれた。

10時15分同氏の挨拶あり Orengo 氏の UEA の委員會の報告があり、つづいで各分科會の報告があり Malmgren 氏が LKK の本大會の功勞者の名をあげて感謝をのべ Fethke 氏のトーキーの報告。Orengo 氏の來年のローマ大會への招待の言葉 Julin 氏の閉會の辭あり La Espero によつて12時20分無事閉會。

今年の萬國大會は、近年稀な好成績を收めた。

毎年大會中に開催される Somera Universitato は今年程内容の充實したものは未だ嘗つて例のないことである。名譽會頭 Jansson 氏の本職が學校長であるから特にこの方面に力瘤をいれたものだらうと思ふが、大成功であつた。

全體で四日間に亘り各國のそれぞれの權威者を網羅した御手際は鮮かなものである。即ち言語學的方面では、英國リバプール大學の Collinson 教授、ローマ大學の Migliorini 教授を招きその他の方面ではブタペストの Langlet 教授、ストックホルム市長 Lindhagen 氏、瑞典ウプサラ大學の Collinder 教授、ウプサラの Nordenstreng 氏、芬蘭ヘルシンキの Setälä 氏、Karlskrona の Beckmann 博士、洪牙利ブタペストの Szilágyi 博士、ナポリの Musella 教授、ストックホルムの Bannbers 及 Jansson 氏といふ顏觸であつた。

新生 UEA の前途明るし

ストツクホルム大會における劇的場面
UEA の舊勢力は殆んど沒落す

時夏の Kolonja Kongreso において確立した Interkonsento de Kolonjo によつて年來對立した舊 UEA 派と UFE 派の妥協が成立し UFE 派は名をすてて實をとり UEA に花をもたせた（本誌昨年度 278—279 頁參照）がその後舊 UEA 派のつくつた新生 UEA の statuto には猶幾分上記 Interkonsento にそぐはぬ部分もあり心ある esp-istoj の不滿をかつてゐたが何分新生 UEA には Kreuz（元ICK の direktoro）のみ新顏でその他の Komitatanoj 等の役員の顏觸はそのままになつてゐたので新 statutoj もこれらの人々の手によつて運用されたのでは十分滿足でないことは云ふまでもないことである。

新生 UEA も舊 UEA 派の役員をその儘働かしてをいたのでは reorganizo の効果は些か疑問であつた。殊に舊 UEA に巣くう某某氏の如きをそのままにしておいてはとは心あるものの考へた所である。UFE派がこの舊態をそのまま何時迄も默視してをる筈がない。機は熟した。かくて本年のストツクホルム大會の第3日（8 月 6日）に開かれた UEA 委員會に於て UEA の新幹部が選出されその結果は UFE 派が大勝をえて舊 UEA 幹部の重だつたものはすべて枕をならべて落選した。

この事實に憤慨した UEA 會頭 Stettler 氏は翌日の大會第 4 日の UEA の laborkunsido の途中で昨日の委員會が 20 年も UEA の委員であり 8 年間も副會頭として自分を助けてくれた Karsch を始めこれ迄 UEA に盡した Privat 及び A. Cseh の三人が委員を落選したことは甚だ遺憾であることを述べこれらの人々と行を共にした自分も會頭を辭任する旨を宣言し議長席を去つた。UEA の委員會は秘密會故何等昨日の事情をしらぬ一般出席者は突然の辭任聲明をきいて呆氣にとられた。

そこで Isbrücker が事件について漠然とした説明をなし Stettler の辭任を延期されたき旨をのべたので Stettler は再び議長席についた。ついで Bastien, Bujwid, Setä ä, Goldsmth, Nylén, Aron 等の人々が或は昨日の委員會の投票はまつたく秩序よく運ばれたのであつてそれには何等異議をはさめないがその投票の結果は面白くないと述るもの或は古い UEA の功勞者をもとの位置におけ等いろいろ意見をのべたが何等の決論も見出されそうもないので Jansson の提案によりあとは翌日に延期する事に決定。

翌日（第5 日）laborkunsido が續開され UEA 新副會頭 Bastien が議長となり委員會での出來事を説明することになつた。彼の説明は次の如くであつた。

『大會には 14 名の komitatanoj が出席した。そしてそれらが投票をした。その結果は Stettler の豫期に反したので彼は prezidanto を辭任した。委員會は Stettler の留任を結局希望した。併し彼は拒否した。云々』

Bastien は Goldsmith に猶詳細につき話すことをのぞんだ。彼は次の如く語つた。

『委員會は自分に事件の顚末を説明することを委囑した。だから自分はできるだけ objektive に koncize に説明しよう。話はさかのぼるが去年の Interkonsento で reorganizo 問題は萬事解決したと思はれた。

その後新生 UEA には新しい statuto もつくられそれにしたがつて各國の landoj asocioj に代表者選出を依頼してそれの方は（第一種）きまつた。次に第二種に屬する委員の選擧があつて 16 人の委員がえらばれあと選出すべき 8 人がのこつた。この 8 人に對し 11人の名がえらばれ投票の結果 Karsch, Cseh, Privat の三人が落選した。それで會頭 Stettler は Karsch の落選を憤慨して席をたち Jakob も席をたつた。そこで Bastien を議長にえらび Isbrücker, Steiner, Goldsmith をえらんで調停を委囑した。彼等は Stettler, Karsch, Jakob の許にゆき交渉した。而して Karsch に第九位の椅子を與へる事を提議した。Karsch はこれを條件附で受諾した。他の委員連はこれに賛意を表した。併しその後 Stettler は新しい委員會の構成が不滿であるから辭任したいとのべた。かくて昨日の樣な結末になつた』。

とのべた。ついで Isbrücker は Stettler 側につくとのべ今度の事は nova spirito と mal-

nova spirito の衝突で遺憾ながら nova spirito が勝利をしめたのだとのべた。Bastien が今度えらばれた UEA 委員會の委員の名をあげ Karsch の拒否により第九位は Cseh のため rezervi するとのべた。

Petit は自分は UEA 委員會の委嘱によりこの大會に於て同委員會のなした仕事につき説明することになつた。

まづ第一の大問題は赤字豫算のきりぬけである。昨年の UEA 缺損はの二萬スイスフランである。この赤字をつづけるなら一兩年の後には UEA は破産する外方法がない。何とかして之をきりぬけたい。

何をおいても諸君の協力をもとめる。特に delegitoj の眞の laboroj と aktivaj membroj の眞の laboroj をのぞむ。

Orengo は今後の UEA の赤字きりぬけについて抽象的ながら幾分具體的の方法をのべる。

Setälä は malnova spirito は internacia であり nova は nacia spirito だとのべ internacia spirito をおしむとのべた。

Dahl は malnova も nova も問題でない。吾人は個人の利益に動かされるとこなくエス語の利益のために戰へと問題の核心をつく。

Telling は reorganizo に活躍した人は perfidulo de UEA だとのべ今度委員になつた Vogt 博士は UEA の永年の敵だとのべ今 UEA は敵の手に渡つたと過激の言辭を弄し Orengo の行動を政策的蠢動とのべたので、Orengo は憤激し Telling は虚言をはくとくつてかかり一時議場大混亂におちいつた。

Lidja Zamenhof 孃は Zamenhofa spirito をとく人々よ、はぢよと絶叫し個人的の喧嘩は外へでてやつて下さいと叫ぶ。

Bastien 議長はエスのために議論するのだ個人的の喧嘩をやめよとのべ Spielmann は UEA の statuto の變更をのぞみ Bastien は變更可なるもここにてなし能はずと答ふ。

Steiner は UEA の敵といふ語をここできいたがそれはけしからん。Kolonjo の Interkonsento 後の UEA は昔のものではない。今日 D-ro Vogt は UEA の敵ではない UEA 中の一部幹部の敵にすぎぬエス運動の敵ではないと述ぶ。

Baart de la Faille は結局問題は Privat と Karsch 二人についてである。自分は出席者がこれらの人々のために委員會に新しい席を考へてもらふ様決議してほしいとのべた。

Oliver は Telling は reorganizo につとめた國々は UEA の敵だといつたが reorganizo に努力した英佛國は長い間最も UEA のために働いた國々であるとのべる。

Petit は委員會の公開を提案した。Dahl は今度の選擧は statuto によつたもので何等異議を云ふべきものではない。故にその結果につきかれこれいふ必要はない。

Stettler は説明を要求されて立ち UEA は Hodler の精神的遺産として自分と Privat がひきうけて internacia spirito で gvidi してきた。が從來とも各方面からいろいろと惱された。今度の新しい方法もまづ一度試みるもよいだらう。自分は nova statuto をつくつたのである。この荆棘の道をすすむにあたり自分は之迄自分が共に働いてくれた人々なしに努力をつづけてゆけないから辭任するのである。今度の sistemo が絶對に惡いとはいはぬただ疑をもつだけである。自分も大分つかれたから會頭をやめたい。ただ今後は名譽會頭とスイスの代表として委員の席をけがすのみとのべた。

Couteaux はここで少し暴露的に諸君はすべてを知らぬのだ。一例をあげれば Cseh は Akademio の會員の要職に適した人だそれでよいのだ。Privat は Esperanto 誌の編輯者として salajro をもらつてゐる。しかるに我々は今後委員は salajro をうけぬことにきめたのだ。Privat は一年に六千スイスフランももらつてゐた時もある。それで我々は Privat は委員に選出しなかつたのだ。今日とてUEA は internacia spirito が regi してゐることに變りはないと叫ぶ。

この邊で議長は議事をまとめ Telling は自分の過言を謝し議場一般のspirito に服する旨をのべた。12 時 50 分に閉會した。

かくして兩日にわたるUEAのlaborkunsidoj は終り終局の所道理ある UFE 派に味方するものが多かつた樣である。かくて最終の(8月11日)の閉會式に於て Orengo が UEA 委員會（第7日にも開催）の報告をなし先日 UEA の會頭としてえらばれた Merchant 氏に電報で照會したが彼は此要職を拒絶する旨返電してきた。それで委員會は Bastien を滿場一致會頭に推戴することになつた。Bastien は Isbrücker 氏が副會頭を承諾した故會頭をうける旨をのべ且自分は Stettler 氏の代りとしてこの要職につく自分の意見は Stettler 氏の意見と同一ではない。しかし同氏の UEA に對する功績は偉大である。人々は malnova と nova spirito をとくがそのちがひは前者は

UEA が單に數名の人々の肩にかかつてゐたのに後者に於ては komitato 全部にかかるのであるとのべたと報告。

Isbrücker は Orengo 氏の報告の如く自分は UEA の副會頭にえらばれたと挨拶をのべた。

Bastien は『遺憾であるが報告するより外に方法がない。委員會の決議は多少 radikalaj である樣に思はれようが報告する。とにかく昨年のUEA の損失は二萬ヘイスフランである。この調子でゆけば本年は一萬二千乃至一萬五千フランであり來年は二萬フランの赤字である。かくては Hodler 氏の基金も 1923 年に十萬フランしかなかつたものだから今日は名儀上三萬フランしかないが今日の爲替相場では二萬五千フランにしかならない筈。しかもその半分は獨逸にある。だから七八千フランしか手許にない。勿論終身會員費の積立によりなる保證基金は三萬フランあるがこれはスイス國の法律ではその利子のみしか使用できぬのである。だからこの缺損をうめぬとすればあと數ケ月で店仕舞するより外に方法がないことになる。もはや internacia spirito だの nacia spirito だのと理窟をいつてさはいでゐる時でない。

それで委員會は研究してとにかく既に八千をフラン節約の方法考へた。Esperanto 誌もしばらく頁數をへらすだらう。premio も減額するだらう。他の節約は事務所の方である。これについては今云ふべき時期でない。とにかく新委員會は赤字克服にむかつて邁進するのみ。』とのべた。

續いて分科會の報告があつたが一同 UEA の現狀をきいて苦蟲をかみつぶした樣な氣まづい顏でゐた。この時 Isbrücker 氏が立ちあがつて『UEA の興廢此一擧にあり併しここにこの衰運を旣倒に挽囘するために一臂の力をかす人もあらう。現に一人のオランダの婦人が自分の UEA の會費を 250 guldenoj（和蘭）に値上することを申出た。彼女を見ならへ。この部屋の700人の人の中5%たる35人が Membro-Subtenantoj になつてくれれば』と絕叫したので場内は一時に生氣みなぎり我も我もと申込殺倒したので noti するのにこまつて結局 Kongreslibro の會員番號をきいて書きとめた。かくて立ち所に終身會員として一人と、Patrono として二人、Membro-Subtenantoj として 40 人の申出があつた。

Bastien は一同に感謝した。かくて感激の劇的場面が終つた。

新生 UEA はここに名實とも新しい一歩をふみだすことになつた。しかしまだ改革途中である。

我々はストックホルム大會でえらばれた新しい委員の名を次に列擧し今後の活躍を衷心より期待したい。

名譽會頭	Stettler	氏
會頭	Bastien	將軍
副會頭	Isbrücker	技師
委員	Kamaryt	教授
	Malmgren	氏
	Orengo	博士
	Steiner	氏
	Vogt	博士


UNIVERSALA ESPERANTO-ASOCIO
CENTRA OFICEJO: 1, Tour de l'Ile, GENÈVE (Svis).

Tiu-ĉi membrokarto pruvas la membrecon al la Esperanto-movado, reprezentita per *Japana Esperanto-Instituto* kaj *Universala Esperanto-Asocio.*

Kiel legitimacia papero, tiu-ĉi membrokarto devas esti stampita kaj subskribita de koncerna ĝiata oficejo. La membrokarto valoras por la kuranta jaro. Ĉiujare, membro paginta la kotizon, ricevas banderolon kun la jarnombro. Tiun-ĉi paperon oni devas alglui.

Japana Esperanto-Instituto reprezentas la Esperanto-movadon en Japanujo. Laŭ la interkonsento de Kolonjo 1932 ĉiu aktiva membro de JEI estas samtempe membro de la Universala Esperanto-Asocio kaj rajtas la favorojn kaj servojn fiksitajn laŭ la interkonsento.

Simpla membro: Membrokarton, servokuponojn.

Membro aktiva: Membrokarton, servokuponojn, jarlibron.

Membro aktiva kun gazeto: La samon kiel antaŭe, sed plie la revuon ESPERANTO dum la tuta jaro.

Membro-subtenanto: La samon kiel antaŭe kaj plie premion de libroj, libere elekteblaj, laŭ listo.

La kotizoj estu pagataj al la sekretario de la ĉefdelegito de UEA ĉe:

Japana Esperanto-Instituto
財團法人 日本エスペラント學會內 UEA 代表秘書部
東京市本郷區元町一, 振替東京 11325 番

UNIVERSALA ESPERANTO-ASOCIO

MEMBROKARTO

JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO
財團法人日本エスペラント學會

(UEA-JEI Membro-Karto 寫物 $\frac{1}{4}$ 大)

UEA の simpla membro の karto として寫眞の樣なものを作製して UEA へ送附し、UEA の prezidanto 及 direktoro の subskriboj を求めましたがまだ先方からききませんのでお送りできぬことは遺憾です。UEA は別項記載の如く事務所の整理その他で幾分ごたついてゐますから多少おそくなるかもしれませんからその旨おふくみおき下さい。

（JEI 內 UEA 係より）

內地報道

8月20日——9月21日迄に到着の分。報道は日本文で迅速に。地方會誌記事を以て報道に代ふるをえず

東京 ★學會水曜日例會——8月末より Fabeloj III をテキストとして輪講をやつてゐる。流石はザ博士の譯で時々難文にぶつかるし面白い用例にもでくわして愉快である。エス語の奥深い語學的研究はやつぱりザ博士のものがよいとつくづく考へさせられる。

學會水曜日例會

時:——毎週水曜日午後正七時から
所:——東京本鄉元町日本エス學會階上(市電本鄉元町下車省線水道橋又はお茶の水驛下車——お茶の水文化アパート横入)
費:——無料(出席歡迎)
催し:——7—9時迄 Fabeloj III (Andersen. Z 博士譯) をよみます。徹底的に語學的に研究する筈(輪講、但し初學者は聽いてゐるのみにて可)
9時以後は雜談その他
日本エスペラント學會

★エスペラント文學研究會——9月16日午後7時から、三宅氏方で。大崎和夫氏、林房雄「青年」について Esp. 講演。次回は、機關誌「エスペラント文學」の ĝenerala kritiko にあて、11月は、公開研究會を催す豫定。公開研究會以外の月例會にも一般の來聽を迎歡。
★アテネ・フランセ——新しく開講のエスペラント科は18人の參加者あり猶今後も續々申込ある筈。講師田沼氏。初等は毎火、木、土、午後5時15分—6時15分(9月7日—2月28日まで)。月謝2圓。(入學金1圓)。
★エスペラント佛教研究會 (Rondeto de Budaisma Kulturo) 設立——竹內藤吉氏等の主唱により上記ロンデート設立。第一期事業として佛教文献のエス譯と佛教徒にエス語宣傳をなすために努力する。その手初として汎太平洋佛青大會の印度代表 Valisinha 氏(大菩提會主事)に Pali 語で三歸依文、五戒文、法句經(一部)、轉法輪經(一部)、をレコード兩面に吹込んでもらつた。これは佛教原典研究の參考とパリ語の聲音研究のために役だつからである。同研究會の事務所は當分東京市本鄉區湯島六丁目七に置く。作製レコード僅少であるが特志家に頒布するとの事故希望の方は同會宛照會されたし。

學會主催秋季 エスペラント講習

★初等科
日時——十月一日から十一月廿九日迄毎週月、木兩日午後七時から二時間
講師——田代晃二氏
用書——エス講習用書
會費——全期3圓(前納のこと)(學會會員は2圓)

★中等科
日時——十月二日から十一月卅日迄毎週火、金兩日午後七時から二時間
講師——田沼利男氏
用書——Siego en Sebastopolo (Tolstoj) (35錢)
會費——全期3圓(前納のこと)(學會會員は(2圓)

申込は講習開講當日。會場で受付
會場——本鄉元町日本エス學會階上(市電本鄉元町下車お茶の水文化アパート横入十字路角)

横濱 ★横濱エス協會——◇例會毎木曜19時より伊勢佐木町有鄰堂階上にて。8月23日——「エス」誌批評會(佐伯達雄氏)一般的エス界の問題にもふれて vigla な討論が行はれた。8月30日——Vespera Pikniko 海岸公園から山手へ。參加者20名。途中雨で流會。9月6日飜譯の研究(飯田龜代司氏)。ツルゲネフの散文詩について Kabe と Mexin の二つのエス譯生田春月中山省二郎の二つの日本譯を對照した興味ある研究。◇委員會9月8日。10月のプログラモ決定。其他。
★YMCA エス會——毎月曜19時よりクラブ室にてザ演説集輪讀。自由會話。かねて計畫中のエス展覽會を9月17, 18の兩日YMCA一階にて開催。更にその後初等講習を開く筈。期間10—11月毎火、金午後7—9時。費1圓50錢(用書代共)。
★神奈川ロンド——毎月曜19時半より神奈川區平川町83保坂方。Ŝakuntala 讀了。L-

ngvo Stilo Formo の輪讀中。

◇豫告——10 月 21 日(日曜) に鎌倉アルプス經由鎌倉江ノ島方面へ遠足會を催しますから多數同志の參加を希望します。詳細は上記神奈川區平川町 83 保坂氏方横濱エス協會へ照會の事。

札幌 ★札幌エス會——9 月4 日明治製菓に於て總會を催した。第三回全道大會に第24回日本大會を開催することを提案する事其他種々の決議をした。その他例會では第三大會のため猛烈な會話の練習をしてゐる。

金澤 ★金澤エス會——當市香林坊の二葉屋書店の montrof nestro にて 8 月 3 日より15日迄小スエ展を催した。緑星旗で飾り各國見本市、萬國大會のポスター各國發行のエス文パンフレット外國通信の實例各國の雜誌等を數百點等陳列した。非常に効果があつた。(寫眞參照)。◇初等講習——8 月 10 日より19 日迄縣立圖書館にて瓜生氏指導の下に開講。講習生10名内 f-inoj 2名、皆熱心だつた。◇角尾氏夫妻歡迎會——高岡エス會の角尾氏夫妻は 8月 14 日當會訪問 trinkejo「しばふ」にて歡迎會を催す。由比氏を始め十名程集り愉快に話しあつた。◇荒木氏兄弟當市へ轉任 - 城端エス會の同志荒木氏兄弟は當市へ榮轉、高岡銀行金澤支店詰となられた。◇土岐氏來訪——金澤一中出身横濱エス協會の土岐氏は 17 日由比氏を訪問さる。◇竹内氏訪問——東京にて汎太平洋佛教青年大會にて活躍の竹內藤吉氏は8 月 18 日講習會を訪問された。そして一同の求めにより同大會出席の印象、各國代表との會見談、長野松本市のエス運動等の話があつた。◇佛青大會印度代表 Valisinha 氏の來澤をきゝ某新聞者の誤解にて由比氏がエス語通譯として同氏をむかへたが同氏は英語にて話せしのみ故由比氏英語通譯に早替り話の間にエス語の宣傳に努力した。同道の高見代議士にもエス語の宣傳をした。◇8 月 21 日例會をかねて初講生歡迎會——19時より石川貯蓄銀行二階にて開催。集つた人由比氏桝野氏を始め17名。f-inoj 2 名。まづ自己紹介の後桝野氏歡迎の辭をのべ瓜生氏の感謝の言葉。由比氏一同への注意と希望をのべた。荒木氏の講習生を代表しての挨拶あり(以上エス語)坪田氏の中等講習開催の豫告、荒木氏兄弟の外國通信の話坪田氏のエス譯歌練習による學習の効果の話。由比氏のエス語音頭名古屋音頭等興味深く 22 時半散會。◇8 月 30日より毎木曜中等講習を開く。講師由比、坪田兩氏。◇9 月 8 日 池田中尉歸省——坪田桝野氏訪問連立つて由比氏瀬川氏訪問、北陸大會の日時決定。◇9 月13 日竹內氏中等講習を訪問された。◇9 月 15 日例會——北陸大會協議會。

第 8 回北陸エス大會

金澤市にて。栗ヶ崎へ ekskurso

10 月 21 日(日曜) **教育會館**

10 時——大會發會式

1. 君ヶ代齊唱。2. Espero 齊唱。3. 準備委員の開會の辭。4. 大會會頭推選及同挨拶 5. 各會代表の挨拶。

11—12 時——大會協議會

1. 次回大會地の決定。 2. 提案討議。 3. 各會の方針狀態報告。

辯論會

——記念撮影——

13 時——兼六公園案內市内散策。

14.5時—16.5時——栗ヶ崎遊園へekskurso 河北湖大野川ボート遊び

19 時晩餐會——餘興

20 日夕 19 時講演と音樂の夕べ開催の豫定; 講師瀬川氏、小寺氏、有名音樂團出演。

北陸エスペランチスト聯盟
大會準備委員
金澤市新竪町坪田方

名古屋 ★名古屋エス會—— 6 月 15日より毎週金曜日の 19—21 時中區新柳町電氣百貨店階上で中等講習を開催。講師わ金子、由比兩氏。用書 Karlo 受講者わ初講を了えた方々を中心として 12—13 名。◇6 月 16 日 19時半から松坂屋裏の番茶の家で二水會を開催す。司會者川村淸次郎氏。出席者 10 名。22時散會。6 月 27 日第 5 回定時總會を 19時30分 より同じく番茶の家で開催し、會計報告(竹中委員)庶務(由比委員)會合について(金子委員)等ありたる後委員の改選を行ひたる所滿場一致で次の3氏を選任す。新委員新井憲一(再任) 松本重一(重任)山田弘(重任)補缺谷村道夫。因に委員わ繼續委員竹中、金子、由比氏等と共に 6 名である。22 時半散會。◇7 月 11 日 19 時より松坂屋前櫻小路泉喫茶店にて二水會を開催。司會者竹中治助氏。新舊會員の紹介後 Amuzaj ludoj によつて打興じながら會話の練習をなす。とても賑やかな會

合。◇8月3日毎週金曜日の夜開催の中等講習會々場を東區新道町2丁目德源寺小島氏方に移す。◇8月8日17時より岩井町電車通り大須ビル3階にて二水會を開催。司會者わ内藤爲一氏。8月6日當地に赴任されたばかりの小坂先生。最近名古屋え轉住のマヨール氏。近く渡滿せられる二等軍醫の渡邊行孝氏。學會理事井上氏等珍しい方々も出席せられて今までにない atmosfero を感じた。出席13名。22時散會。◇8月13日19時より委員會を東區東大曾根町本通り山田弘氏方に開催し各委員の分擔事務を定める筈であつたが新井委員缺席の爲め協議することをえず從來の儘とし次に由比氏の補缺として名古屋聯盟に對する代表委員を互選した處竹中氏當選就任、尙機關誌 Bulteno de NES を Ora Delfeno と改題することを決定す。8月22日19時より中區鐵砲町二丁目白木氏方に四水會(會話會)を開催した。出席4名。21時散會。◇9月12日17時より松坂屋前櫻小路泉喫茶店に於て二水會を金子美雄氏指導の下に開催。マヨール氏始め15名出席。2.時半散會。

★名古屋エス聯盟――◇7月15日19時半より櫻小路泉喫茶店に於て矢崎氏司會の下に金澤放送局え御榮轉の由比氏送別會を開催す。出席者わ名古屋エス界の重鎭新井(鐵道)金子(聯盟)、川村(ルーマ・クンシード)、鹿島(YMCA)の諸氏を始めとして22―23名近頃にない盛會であつた。22時半散會。

大阪 ★大阪エス會――◇8月21日會話會。如何にして lokaj grupoj 及 kunsidoj を活潑にさせるかにつき熱心な討論をなす。"Kariero de iu esp-isto"(川崎直一)。8月28日「各萬國大會へ日本より參加した人々」(進藤靜太郎)。9月4日本日よりフランス篇輪讀。川崎氏懇切に konsiloj をなす。R. O. 合評。北平訪問朝日機に托して、北平エス會へ送る OES よりの salutletero の署名(進藤提案)を集む。◇9月11日定時總會。會計報告。補缺委員選擧(一名)委員改選(三名)。新委員會の顏觸は松田勝彥(例會)、兒島壯一(講習)、桑原利秀(文庫)、西田英夫(書籍取次)、黑崎誠(會計)、進藤靜太郎(通信)。

◇OES 10月會合豫告――2日輪讀、7日(日曜)攝津耶馬溪方面へ遠足、午前9時大阪驛上り三等待合室集合、費50錢辨當持參の事。9日RO合評、JEI大阪支部總會。16日會話會。23日「エス」友の會。30日通譯練習。(例會毎週火曜後7時より北區絹笠町大江ビルにて。會話會は平野町 La Trapezo にて)。

日本エス學會大阪支部代表改選

を次の様に行ひます。御出席下さい。

所: 大阪市北區絹笠町大江ビル
時: 10月9日(火)午後7時

★新星會――◇例會――毎土曜日19時より(但第三土曜は休み)散文詩輪讀、司會者黑崎氏。◇會話會――御堂筋大阪ガスビル喫茶部に於て毎月第三日曜日18時より司會者兒島氏。8月の會話會に於て佛教濟世軍の同志中西義雄氏の「第二回汎太平洋佛敎靑年大會に參加して」と題して話があつた。出席20名。

◇秋季遠足會豫告――10月7日(日)攝津耶馬溪方面。午前九時大阪驛上り待合室集合。

京都 ★京都エス聯盟――9月2日淸瀧空也之瀧方面へ久し振でピクニークをなす。參加者11名。九月にも拘らず瀧の傍は寒さにふるえる位である。晝食を谿流の傍にてしたゝめ15時頃嵐山に到着。こゝにて舟遊に興

じ、17 時過無事解散。次回 Pikniko は 24日祭日湖南アルプスの大神山へゆく。(西村勇氏報 ―寫眞參照)。

和歌山 ★日本國際協會和歌山支部子供部(國際日曜學校)エス語講習 ―― 和歌山市吹上小學校にて。8 月 2 日より 12 日迄毎日午前中二時間。講師奥村林藏(大阪エス會々員)。目的は簡單な國際文通の力を授けるため。初めの五日間は會話法にて問答、六日目より外國文通の實物實例を示し和譯エス譯の練習をなす。記念寫眞をエハガキに印刷して文通に使用する樣にしたのは面白い考である。(本誌掲載の寫眞はそのエハガキの畫面である。)

福岡 ★學會福岡支部――9 月 12 日(水)19時よりなぎす屋に於て臨時總會開催。出席者 15 名。當支部の今後の運動方針其他に付き協議、月例會並に初等講習會開催の件を決議す。◇月例會。每月 15 日、會場橋口町なぎす屋菓舗階上同志の講演並に懇談會を行ふ初回 10 月 15 日。◇初等講習會。10 月 20 日(木)より毎週月、木二回 19 時より會場同上、講師川關氏、用書短期講習讀本。

福岡縣 ★ミヤコエス會――會創立當時よりの同志稗田氏は今度大分縣津久見町九水津久見變電所に御榮轉されたので去る8 月 2日豐守氏方にて送別會をやり記念撮影をした。(寫眞參照)。

久留米 ★久留米エス會――去る 6月創立以來毎木曜日 19 時半より中央通り三丁目つちや足袋本店にて輪講開催中。用書ザ演説集。8 月 30 日福岡支部の堀内氏を迎へ初等講習開催につき懇談。

宮崎 ★宮崎エス會 ―― 中等科は每週月曜郡司氏宅にて愉快に研究を續けスラヴ篇を終へて、フランス篇にうつつた。皆熱心に研究するので進歩も早い樣である。初等科は崎村氏の熱心な指導の下に文華堂書店にて每週月木兩日を學習してゐる。本部氏が最近職を退かれ鄉里妻町へ歸られたことは殘念なことである。同氏の妻町での活躍をのぞんでやまぬ。秋期初等講習もその中開催の筈。

鐵・道・と・エ・ス

聯盟本部◇8 月の指導:エス文特輯號の發行に際し、我々 Esp-isto としてある程度のエスペラント技術は絶對に必要であるが、その技術を得る方法としてエス文を大いに書くべき事、更らに進んで鐵道に關する文獻を豐富にする樣努力すべきである。◇9 月の指導:
1. エス運動の基底は各地方會にあるのであつて、各會が堅實な基礎をすえて初めて運動全體が活潑になる。又會の發展も指導者の量の增加に伴はなければ非常に不安定である。幾つかの實例に省みて會全體が一つの有機體として働く樣量と質と相關聯しての發展を計るべきである。

2. 講習の好期を迎へて、會員の確實な增加をはかる唯一の最上の方策として各會に於て初等講習を開催せよ。開催に當つては今春機關誌上に輯めた各會の研究を實地に活かすべきである。

〔上記の通り聯盟機關誌 Fervojisto 8 月號はエス文特輯號で、二三の鐵道文獻が含まれてゐる。國際通信等に御利用の向は御申越下さい。但し郵券 2錢同封の事。東京市鐵道省工務局保線課田中覺太郎宛〕。

東京 ◇團體通信の開始 ―― 本部に通信部を設け外國の鐵道團體と鐵道業務の知識交換等團體通信を始める。尙同部で個人通信をも奬勵する。◇會組織確立一周年の爲め機關誌は記念號を出し、他の地方會からの會批判記事を載せた。◇役員改選聯盟本部との事務分離の主旨を以て聯盟とは別の人で常任委員會を構成、聯盟主腦部は事業協議機關たる中央委員として會事業に參劃する。◇各ロンデートから選まれた委員の中央委員會は月一回開催、頗る活潑な會である。◇研究會“繪のない繪本”を用書として每週木曜。講習の型式によるので講師前半青木氏、後半伊藤氏。出席約 20 名。◇Stela K. 第 1, 3 土曜、演説練習會 temoj: Pri mia gusto (8 月 21 日司會者栗山孃) 出席 15 趣味の十人十色にいまさら驚嘆。◇月例會、懇親會 7 月 14 日上野動物園へ。8 月 24 日水泳の納め會を兼ね西瓜とり等。◇Nova K. 每火午後6時半から新宿白十字で賑やかな babilado が 2時間續く。出席者每回 10 數名。時折地方からの訪問者が來る。◇水泳部――逗子海岸は天候に惠まれず昨年よりは稍々成績おち1日平均9名。併したてた大きな綠星旗の宣傳効果は莫大であつた。

郡山 中等研究會――六日に1 回の割合に例會を開く。用書 Ezopo. 司會澤栗氏、最近初等講習を開く豫定。

京都 鐵道俱樂部に每二、七の日午後 7時より輪讀會を開く。用書カルロ、出席3。每土曜日福知山より大谷氏を迎えて同所に研究會を開く。用書“大尉の娘”。

大阪 初等講習講師、上野氏、用書 Konversacia gazeto 月、木、中等講習今澤氏、用書



→
和歌山の日本國際協會支部子供部のエス初等講習
4. 小笠原（支部長）
5. 兒玉（支部員）
9. 奥村（OES）
12. 福原孃（KFA）の諸氏

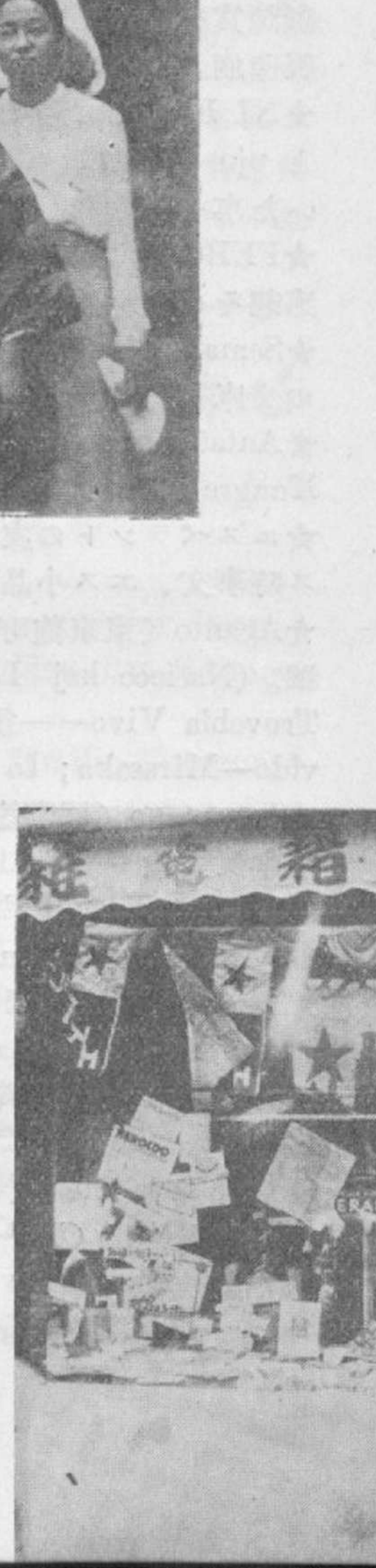


→
京都エス聯盟清瀧へ遠足（西村氏撮影）

↓ミヤコ・エス會稗田氏送別會
左より〔前列〕南、稗田、鮎川、〔後列〕中村、豊守、猪本の諸氏



→
金澤二葉屋書店における小エス展



"父歸る" 及雜誌、火、研究所、浦田氏、用Bona sinjorino 及雜誌。場所は何れも倶樂部會議室。(鐵道の項青木氏整理)。

地方會機關誌其他

★MER (盛岡) 8 月號。(盛岡を中心としたエス運動の走書的覺書——松木愼吾其他)

★La Granda Urso (N-ro 2), La Norda Kruco (N-ro 8) 合併號。(苫小牧) (苫小牧エス運動小史——渡部隆志: 竹取物語 ——Igaraŝi 氏エス譯其他)。La Fervojisto (鐵道聯盟) 8月號。(Deveno kaj Progreso de Fervojo en la Mondo——小松; Birdallogo en Neĝobaran Arbaron por Protekti Arbojn de Fiinsekta Mordado——矢島; Studoj de relo en Japana Ŝtatfervojo——青木; 其他寺田、高橋、大谷、石田、菅沼、栗澤、上野、長尾の諸氏の小品) 〔活版印刷〕

★Esperanta Literaturo (文學研究會)。7—8月號 (Du Kulturantoj——三宅; Vilaĝoj Malsatas——Cicio Mars; Vermiĉelo——中垣譯; 飜譯實驗室、名士問答欄Recenzo 欄等々)。〔活版印刷〕。

★NI KORESPONDAS (兵庫縣) 16 號 (ĥ と ujo——福來; 記雜帖——Jamasa; 氣がついた事——大和; 其他)。

★FERO (大阪鐵道) 4 號。(初講についての感想その他)。26 頁。

★Semanto (宮崎) 9 號。(誌上 hospitalo; 會の文庫書籍一覽表等)。

★Antaŭanoncilo de la 3-a Hokkaido Esp-ista Kongreso en Otaru. 2 號。

★エスペラントの友。8月號 (其社)。(報道エス時事文、エス小品その他)。

★Aganto (東京麹町九段 3アガント社)。創刊號。(Nacieco kaj Literaturo——西川; Ofte Trovebla Vivo——須磨; Serĝento kaj Seksavido—Mirasaka; Io Valora——桑野; 其他)。

★Intersteno (國際速記) 8 月號。エス式ローマ字反對論——Toida)。

★La Bulteno de KEA (神戸)。8月號。(Esenco de Budaismo; Mia Majstrino de l' Unua Altgrado—— 原木譯; De Marbordo Suma——峯谷; En Ŭakajama——福原; 其他)。

★KFER (京都鐵道) 4 號。(Mia Nevo——國枝、その他)。

★La Verda Stelo (ミヤコ)。8 月號。(北九州エス運動憶出 (5)——中西; La Espero——田中顯; Klarigo de Simetria Koordinata Metodo—— 鮎川譯等)。

★Verda Haveno (横濱) 八月號。(運動と理念 —— 佐久間; Esp. 語彙の分析 —— T. J. 譯其他) 印刷美麗。

★La Paco (大谷大學エス會) XI 號。本號より活版印刷。菊版本文 16 頁。表紙優美。(谷大 esp.-isto の使命——泉芳璟: 我等が時代の谷大エス運動—— 池浦良雅; 谷大エス會の復興 —— 太宰不二丸; La instruo de Budao ——K. Kanĵa 譯; Himno de Meditado de Hakuin——K. Obstinulo 譯; Mortinta Sekreto——K. Kanamatz 譯等)。

年二回こういつたものを出してゆこうといふ谷大エス會の意氣込は大したものである。大いに發展を祈りたい。

★Kor FER (郡山鐵道)。3 號。Gaja Pikniko al 松島——澤栗; エスを知るまで——會部: Somero 其他)。

★Bulteno de KEG (金澤)。2 號。

★Verdo 創刊號。(エス偶感——Tokiĵi; 日常會話講座 —— 村上、會則其他)。(秋田縣北秋田郡綴子村村上秀夫氏方、秋北線の會機關誌)

★L' Aŭditorio (築上)。3號。Utileco de Esp., Ĉio okazas en la mondo, Ni estu atentaj; 井上初等讀本の講義。

新聞雜誌とエス

★アス (帶廣市西一條 3 の 2アス社) 創刊號。(La Grupo de la Literaturo "L' Asu" なるエス語の titolo を附す)。

★臺灣日々新報 (8 月 22, 23 日夕刊)「エスペラントと日本主義——井上照月氏」

★中外日報 (8 月 15—16 日) 汎太佛青果して成功せしや——亞中令悟氏。

★中外日報 (8 月 17 日) 佛青大會の成果と用語——柴野留美氏。

★中外日報 (8月 16日) "LA REVUO ORIENTA" (佛教號紹介)。

★OHM 7 月號。 Lastatempa studado pri Medicina Elektro.

★OHM 8 月號。 Mezurado de Nenormala Volteco.

★世界と女性 (第一卷第四號) —— エスペラントの世界大會 —— 磯部幸子。(京橋區銀座西七丁目五番地國際子女親善協會發行)。

★北國新聞 (4 月 3 日)——パリーの國際見本市とエス語——桝野助次郎氏談。

★北國新聞 (4月 21, 22, 23 日) 小學教育と國際語 —— 竹内藤吉氏。

★北國夕刊新聞 (7 月3 日) 正しい日本の姿を歐米に紹介したい——エツケルマン氏談。

★北國新聞（7月5日）——性格まで似る日本人と獨逸人——エツケルマン氏談。
★北國、北每、大每、北夕各新聞（8月5日）初等講習豫告。（以上五項金澤エス會報）。
★北陸每日新聞（8月12日）——初等講習印象記——平石氏。

國際語研究主催

第一回公開研究會

時——10月13日(土)午後7時より
所——日本エス學會階上
講演 1. あいさつ——高木弘
2. 獨立語として用ひられた語根——岡本好次
3. ユダヤ思想と Zamenhof——岩下順太郎
主催 國際語研究
後援 日本エス學會

關西の同志各位に

御見舞を申上ます

過日の大暴風の御被害ができるだけ僅少であることを祈上げますと共に略儀ながら誌上を以てお見舞申上げます。

財團法人 日本エスペラント學會

1934 年鑑追補訂正

築上エス會 Ĉikujo Esperanto-klubo
福岡縣築上郡西角田村大字眞如寺 994
1. 田中顯道（上記）、平野英司（同村）
2. 毎月1日11日21日（19—21時）
3. 會事務所 4. Aŭditorio（年回）
5. 初等講習會出張教授、エス文獻點字譯。（依囑に應ず） 6. 5.

正誤表

頁	欄	行	誤	正
212		7	lia	sia
213	右	7	Lecerto	Lacerto
〃	左	24	kameleon	kameleono
245		-2	salajron,	la salajron,

Lingvo-Libro 第三號到着

一部七錢（送料三部迄2錢七部迄4錢十部以上當方負擔）第一號、第二號、第三號、各一部宛同時御注文に對しては十五錢、送料二錢でお頒ちします。（學會取次部）

毛内千敏氏御逝去——青森縣におけるエスペラントの先覺者たる毛内氏は去る8月末死去されました。享年33歳。謹んで哀悼の意を表します。

LM 誌特使 Lejzerowicz 氏來朝一時見合せ

Literatura Mondo 誌の方から9月3日學會着でL氏の夫人及令孃病氣のため十分打合せ不可能だつたが近々詳細報道すると申越しました。

ついで9月23日當會着の次の如き文面の手紙が來ました。

Temas pri tio, ke la tuta eŭropa gazetaro estas plena pri militdanĝero inter Sovetio kaj Japanujo. Li do petas nin prokrasti la aferom, ĝis la situacio klariĝos, ĉar li timas, ke en malbonaj cirkonstancoj li gluiĝos en la ekstrema oriento.

Tiun eblecon ankaŭ ni timas, ĉar en tiu okazo ni devas pagi al lia familio ĉiumonate certan sumon, tiu farus la 40% de niaj ĝisnunaj salajroelspezoj. Do, ni devas iom atendi. Se la pritraktoj inter la du landoj pri la transpreno de la manĝuria fervojo finiĝas sukcese, tiuokaze almenaŭ por certa tempo la militdanĝero estas for kaj ni povas tuj disponi pri la ekveturo de Lejzerowicz. Ni esperas, ke vi kaj niaj aliaj japanaj amikoj absolute komprenos tiun situacion, eĉ se vi estas konvinkitaj pri la maleblo de la milito. En 1914 ankaŭ multaj sinceraj eŭropanoj kredis malebla la militon....

これによるとL氏は北鐵讓渡交渉さへまとまればこちらへ來る樣な模樣ですが當方としては9月3日着の手紙に對し9月10日に「L氏が9月中に渡日不可能ならば之迄兩者で交換の契約は更めて新規まきなほしに交渉したい旨申おくりました。」それで今月中にはくる見込はありませんから當分無期延期とします。いろいろ同氏招待につき御盡力下さつた地方會各位に厚く御禮申上、且右の事情ですから惡からず御諒承願上ます。

財團法人 日本エスペラント學會

昭和九年九月廿五日印刷納本
昭和九年十月一日發行（毎月一回一日發行）
ラ・レヴオ・オリエンタ（エスペラント研究）第十五年第十號

定價廿錢（送料二錢）

編輯印刷兼發行人　財團法人 日本エスペラント學會　右代表 大井學
東京市本郷區元町一ノ三